

大
勝
利
年

在
大
勝
利

●登場人物

本田宗（ほんだつかさ） 美術部の残念貴公子。

鈴木ラン（すずきらん） 漫研のエース。うるさい。

元口小生湖（もとぐちこもこ） ランの相方。美人。

山葉春（やまははる） クールビューティ優等生。

川崎善二郎（かわさきぜんじろう） アマガエル色の脳筋。

「……ささ参ろう」

「ちょつ、ちょつと待てなんでカギ一つしか持つてないんだ」

「だつて一部屋……あ」

「『あ』じゃねえ。一部屋で何だ一部屋で、ちょ」

「あー……ポンちゃんだね。もつちゃんじやないんだよね。忘れてたわ……」

「おいおいおいさすがにそりやまじーだろ、フロント行つて部屋二つにしてもらおう
いや。たぶん無理。今日パンパン。見たでしょあのフロントにたむろうオタク共を」

「お前もだろ。えーつ、ちょつ」

「まま、ちょっと部屋見てみようよひよつとするとソファで眠れたりするかもしねないし」

「部屋一個つてのが問題なんだよ！」

「あたしや構わないぜ、どーセ起きてるし」

「俺が構うんだよ」

「ツカサクン、ナイーヴねえ」

「いやあのな」

部屋に着く。ドアを開ける。
……ダブルベッド。

「……おまーな」

「あら。ダブルつて、ベッド二つじゃなかつたつけ！」

「そりやツインだ」

「しもうたわ……予約探してて『あこれ空いてる』とかポチッてもた」

「お前と元口の関係を疑いかけたよ。いやしかしどーすんだこれ。付近のホテルとかもどーせい
つぱいなんだろ？」

「そおよお。何ヶ月も前から予約が戦争なんだから」

「ひー」

「まあいいじょんどーせあたし徹夜してるし、あんたさえその気になんなきやいーことで」

「いや……」

「なるの？」

「イヤ！」

「ぱるつペには内緒にしどつから」

「それはどうでもいい、つーか全員に内緒にしろ」

「あたちとうわちやになるによがそんにおいやかちら」

「イヤです。」

「へーいへい。

詫びにメシも奢るは。なんでも食えファミレスだけど

「いやそれは最初から条件に入つてただろ。いや、マジメな話俺はいーけどお前ホントいいの？」

「いいよん。ほれ荷物置いて出撃」

「ああもう行くのか」

「ご休憩しちゃう？」

「おまホンマな」

「ジョーダンジョーダン。

……ちよつとこれ画材なんだけど持つてくれる？」

「メシじやないの？」

「メシ後そこで作業！」

「迷惑客め」

ここは海浜地区に近いとあるビジネスホテル。
事の起こりは昨日急に、この鈴木のバカが

「ポンちゃんごめん明日明後日土日ヒマ？　ああヒマだぜ鈴木のためならなんだつてする。わー¹
嬉しい！　じや一緒にコミケ行つて。ああ俺一度行つてみたかつたんだ、ウエルカムだよ。
ということで」

「泣かすぞ」

「いつもコンビ組んでるもつちゃんが風邪引いてー！」

「そうなのか。まあヒマはヒマなんだが、それつて一人では行けないものなのかな？」

「あのね荷物とか結構あつてね、お店開くわけだからさ、一人だと休憩もできないのねお金とか
扱うから」

「ああ……まあ、確かに一度観てみたいかなと思つてないわけでもなかつたことは確かなんだが
……」

「でしょでしょゲージツを愛するものとして」

「いやまあ……え？　明日明後日つて連荘なの？」

「明日前入りで明後日本番」

「うわ気合入つてんなー」

「宿も取つちゃつてるから今からキャンセルだとナンボも返つてこないし。あもちろん宿と電車
賃は持つ」

「……うーんまあ、しかし投下コストに得られそうな便益がフィットしてない気が」
「わかった。晩飯朝飯昼飯も付けよう」

「んー」

「親友のフリルの似合う可愛い美少女が頭下げて頼んでんだから鼻の下伸ばして二つ返事し
ろ！」

「頭一秒も下げてねーじやねーか。

まあ、しきょうがねえ、漫研とは貸し借りあるしな」

「イエース。行くよ美術部展。今度も。みんなで」

「いつもホントすいません。つまらないものをお見せしまして」

「いえいえこちらこそ。つまらない機関誌を押し付けまして」

「いやつ。おもしろいと思いますよ、ラン先生のお書きになる四コマは。懐かしい感じのスラッ

プステイツクで。赤塚不二夫とかそつち系で」

「懐かしい。最高の褒め言葉でござります。赤塚先生と比していただけなんて天にも昇る夢心
地。」

ワタクシもツカサ先生の抽象画、まつたく意味がわからなくていつも凄い！と思つております。ピカソでもうあと一步

「意味がわからない。最高の褒め言葉でござります。ピカソなんてそんな畏れ多すぎます。ありがとう、浜村・浜村・浜村淳です」

「淳です・淳です・ジュジュツジュ・淳です。

なんでラップなの」

「なんとなく」

「とにかく文化部はおたがい強く助け合わないとね！」

「うむ。それか本気でなんとか甲子園を目指して知名度を稼ぐかだな」

「体制の犬になりきがるぐらいなら死んだほうがマシだー!!」

「こらこら。拡大解釈しそぎ。

んでなんだ、なんか用意するもんあるのか

「ううん。ポンちゃんは身一つできてー」

「ううい

でこれだ。

鈴木の実務能力の低さを甘く見ていた。こいつコミュ力はやたら高くてマンガも結構読めるん

だけど、いや、だからか、忘れ物とか酷いからな。

まあこれがラブコメならここから勘違いラブ・ストーリーのひとつも始まるところだが、現実はそうスイートではない。

ファミレス、夕食一番混む時間はちょうど過ぎてたようで席はあつたが……あつたが……

「……鈴木これひよつとして？」

「そそ。この三日、ていうか四日間？はこのお店諦めてて、てゆーかそれ半分ウリにしてて、タクシーで来る人もいるぐらい」

「げー……みんなスゲエなあ」

机の上に大きな紙が散らばってる、つまり作業中のテーブルばかりだつた。

「ここ一杯だつたらネカフエ行くつもりだつたんだけど」

「家でやつてこいよ家でー。こんなギリギリまでー」

「違うの！ 入稿したあとに描きたいものが出現するの！」

「ひー」

奢るというから高価なものを頼もうとしたが、ここには単品で八〇〇円を超えるメニューがひとつもなかつた。

食い終わつてドリンクバーの薄いコーヒーを啜る。鈴木は早速作業に取り掛かつてゐる。まずは四コマ専用原稿用紙にシャーペンで下書き……

「つてそこからかよ」

「八ページのコピー誌予定。B4一枚折つてB5にするの」

「絵八枚か、强行軍だな」

「にや、四枚はもうある。あ！　ポンちゃんも一枚描いて！　てか描いてもらわないと困る！　もつちゃん居ないわけだから！」

「えー」

「絵、描くの好きでしょ!?　得意でしょ!？」

「いやそりやそーだけど、悪いよ、だつてこれその作品、なんだつけ、これが好きな人が買う本なんだろ？　俺愛無いし」

「じゃイラスト！　イラストでいいから！　ピンナップみたいなんだつたら愛いらぬから！　小綺麗ならみんな喜ぶんだから！」

「小綺麗ねえ」

「アタシ知つてるよポンちゃんが本気出せばめっちゃ絵巧いって。まるでゴッホのよう！」

「そういうビッグネームを出しておだてればノると思うなよ。参考資料を出しなさい」

「ほらきた。はいこれ」

「えーと『俺のお嬢様がこんなにご主人様なわけはない』……どういう意味？」

「このね、この可愛い女の子に見える子が実は男の子で、この執事が当然それを知つてるんだけどこの子がドSでこの執事ドMで愛を持つてイジメまくるの。だけど人前では逆に厳しい執事にしつけられるお嬢様を演じることに快感を感じて、この執事もそのプレイを愉しんでて……」

「余計わからない。

「なんだつまりボーアイズなんとかつてヤツか」

「なんとかラブつてヤツだよ。

「ラブの方が大事」

「たいせつなものを隠すんだよ。

「星の王子様も言つてるだろ？」

「まーつまりなんでもいいからこの二人がイングリモングリしてりやいーのね」

「イングリはキツい。仲良くニッコリ、ぐらいでいいか？」

「時代はアングロサクソンだよ。プリーズ・ゴー・イングリッシュ・モングリッシュ・エンド・

「ダルビッシュ」

「有怒つてくるよツイッターで」

「裸の方が引く線少なくて楽だよ」

「いやたぶんこのゴスロリと執事服着せないと似せる自信無いわ」

「まあ初めて描くキャラだしね。許そう」

「ああ許された……『花の慶次』ってたまに読み返したくなるよな」

「あと『男塾』とね」

口は動かしながらもかなりの速度で手が動く。いやさすが漫研のエース。

「……しかしやるねえラン先生」

「ふにゃ？ やーこのキャラいつも描いてつからオートマチックですよー。でなきや何十個ものコマ埋まんない」

「なるほどな。逆にいいな手を動かす時間が長いってのは」

「えー？ 絵は手を動かすものですよー」

「いや俺はキャンバス睨んでる時間の方が長いかなあ」

「ポンちゃんなんであんな変な抽象画ばつか描くの。ちゃんとした絵描けばめつちや上手いの漫研のみんな知ってるよさつきも言つたけど」

「俺的にはあれが『ちゃんとした絵』のつもりなんだけどなあ……いやなんでそんなの知つてんの」

「美術の時間で風景画の課題出た時にー」

「あああれなあ。先生に『いつもどおりでいいッスか』て聞いたら『玄関に貼るらしいから勝ちに行け』って指示が出てだな」

「聞きしに勝る酷い教師だな」

「ヤツあ酷いよ。部活動でも指導とか無いからね。ずっと自分のやつてる。まあありがたいんだけど」

「いやでもあれいいと思つたよ、『ん?』とかあたしでも思つて一度見したもん。下に『本田宗』つてあつたから奴め、みたいな」

「奴め、なんですよあんなもの絵じやないんですよあたしの基準では……」

「おーおーおーキマシタワあーていすと様のご高説がー」

「高説していい?

「イイヨー キクキクー」

「ちょっとその前にコーチーを

「あたしメロンソーダをカルピスで割つて。氷は無し」

「へいへい」

「あとダージリンを毎回一個ずつつくすねて」「やめなさいつて」

ファミレスのドリンクバーに置いてあるティーバッグって市販のよりも出る量が少ないようを感じるんだけど、どこまでスペシャルなのか。

……あ、もう二枚目の下書きに取り掛かってる。スゲーなあ。一枚何ヶ月か掛かるウチらも見習わなきやいかんかもしけん気がせんでもないような気が若干湧いてきた。

とりあえずこの依頼品をなんとか……

難しいよな人が記号化したものを一度解体して自分の記号で書き直すの……似顔絵から現物想像して似顔絵描くようなもんで……あ違う、これが「現物」じゃねーか俺何言つてんだ。

「……俺が思うに絵、に限らず芸術には二種類あつて

「『ホンダの絵とそれ以外だ』」

「いいねえ。言つてみたいねそんなセリフ」

「自分で言うと痛い人だよ」

「そか。いや、じやなくて、

『慰めるもの』と

『目覚めさせるもの』だ

「お。……おおー。なんかそれっぽい！」

「だろお!? 結構考えたのよこれカンバスの前で」

「わかった。なんかこう、観てると『はにゃん』でなるやつと、観てると『うん、よし!』でなるやつだ」

「そそそ。まあそう。子猫持ち上げて両手広げて『にー』とか『う』の観るともう自動的に顔がほこんで全身緩まるだろ、あれがね、ひとつ方向性として」

「わかるわかる。わかるわかる」

「だから鈴木がいつも描いてるのとかたぶんこれ」

「うにや。子猫のように顔が崩れるのを……描いてる本人は結構崩れてんだけどね」

「それが一番さ」

「『目覚めよ』てのはビックリさせるやつ?」

「いや。ここがね、難しくて。

「単純な驚きじゃなくて、えーと……人間の認識にはー!」

「あキタ！ それダメたぶんあたしわかんない！ ぱるつぺがわからん言うてたもんをあたしに言われてもわからんて！」

「いや、いや、なるべく囁み碎くから聞き流してくれ。

えーとね、人間には非常に便利で不便な機能が備わつていて、それがオートマチック化能力」
「ほう」

「たとえば鈴木がいまこれ手でバーバー描けてるわけだけど、最初は時間掛かつたでしょ一本の線もどう引くかわからなくてー」

「あー思い出すねえ若かつたあの頃を」

「それを練習や反復、そしてコツを掴んだりして、会話しながらカルピス飲みながら手が勝手に描けるようになるわけさ」

「ほいほい。便利じやん。なにが不便なん」

「飽きる」

「……ほー。……あー。……そうかな？ そうかも」

「マンガは線引くこと以外に考えることいっぱいあるからマンガ描くことには飽きないとと思うけど、そのキャラ描いてること 자체は『作業』になっちゃってるだろう

「うーん……まあ」

「と、人間の生活は全面的にこの『自動化能力』に強力に支えられ、しかしこのためには人生は常に灰色になりつつある危機にさらされ続けているのだ！」

「ヒマになつたらいいじやん、昼寝したり、ダラダラしたり」

「ヒマつてこともあるんだけど、やつてることが全部『作業になる』っていうのが辛いんだよ」「ふむ」

「この灰色の退屈な日々をぶち破るもの、それは『我々は死すべき運命にあるもの』ということを思い出すこと。『正常性バイアス』の突破」

「そこわかんない」

「人間にはこれまた便利な機能として、ある程度以下の危機や危険を勝手に棄却してくれる機能がある。これが正常性バイアス。簡単に言うと隕石落ちてきて死ぬ確率は誰にも等しくあるわけだけど、ほぼ誰もそれを気にして生きていられないよね」

「あー」

「交通事故で死ぬ確率が年間二万分の一ぐらいあるんだけど、これもまあ気にしないだろ」「うん」

「そんなことに一々怯えていたらQuality of Life` 生活の質が著しく落ちるので、人間は勝手に『死はない』と思い込んで生きてくれるようになつていて、が、当然これが、」

「ああ、退屈を加速するんだ。

だから『死すべき運命にある』と思いつかせることで世界に色を取り戻す、といういうわけね」

「そうそうそう。どお?」

「そこまでは納得した。ポンちゃんはそつちやりたいのね」

「うん。

いや、『子猫二一』の方もいいと思うんだけど、これって眠らせる方なんで、目を覚まさせる方と逆に突っ走っちゃうんだよな」

「なるほどね」

「対処療法というか、肩凝つてマッサージというか、確かに一時的に楽にはなるけど、肩が凝る生活を改善しない限りずっと肩は凝り続けるわけで」

「一生辛くなつたら揉んでもらうつて手も無かあ無いよ」

「それは『凝りの原因』という根本問題から目を逸らす方向なので、オススメしない。それを意識しつつマッサージしてもらうのは構わないと思うんだけど、そうするとマッサージ自体の効果も落ちるし」

「病は氣からつづ一からねー」

「俺気になるのは現代人はストレス溜まつてるからか……いや現代人に限らないのかなあ、『子猫二一』の方ばつかり求めるのさ」

「まあねえ。

でもそこはホレ、『アートとエンターテイメント』とか、『芸術と大衆娯楽』とか、一応ジャンル分けされてるので」

「それだよそれ！

そこがまたよくない！」

「立ち上がりつたー！」

「え？ だつて風邪薬は対処療法として呑めばいいわけつしょ？ だから分けてあるつてことは

いいことじやん」

「そつちはいいの。逆。

だから芸術つていうのは相手の魂をシェイクして目覚めさせるものである以上はだな」

「ああ。

『これからビッククリさせますよ』

『これからビッククリはしないわね』

「ご名答！」

「ボーズはいいから。

こつちがビックリするよ。

ポンちゃんき、漫研おいでよ。すぐ二人目三人目の彼女できるから」

「一人目が居ませんて」

「春ちゃん泣くよホントに」

「なんでおまえらが俺とあいつをくつつけたがるのか未だに真剣理解できんのだが」

「くつつけたがつてんじやなくてくつついてんだよあーもーイライラする！」

「なんで鈴木がイライラするんだ。

まともかくそういうことで、『いかにも芸術』つてもののヤバさはそこにある。いわゆる現代美術、コンテンポラリーアートがどうしても胡散臭いのは『それっぽい』つて時点で負けてんだよまあいえ。全部が全部じやないけどね

「にやるほどねえ。それは結構なんかスッキリするご意見よ」

「ロックとかパンクとかもそうで、出始めた時は確かに旧世界への革命だつたんだと思う、んだけど、今はもうたとえば『ロックの大御所がワールドツアーア』でもうその時点でき語矛盾というか存在矛盾というか、

『体制を倒せー！』

つて東京ドームに五万集めて言われても

「そこまで言うと微妙かなあ。それはそのー、まあ、いや、魂としてはあるかもしれないの

ー」

「うん、まあ、ちょっと言い過ぎたかもしだん。

ただその、『それっぽい』ものが一番ヤバいんだよ、誰だつてマッサージ受けて子猫ニーを観てる時は『ああこんなことしてもしようがないな、がんばんなきや』ぐらいはわかってる、けど、なんかそういうゲージツっぽいものに触れてると思い込んでる時はむしろ深刻に眠っている、

眠らされている、ような気がしてならん」

「たとえば？」

「ここでそういうマンガやアニメのタイトルを出してもいいのよ。遠慮無く。誰も聞いてないから」

「俺マンガもアニメも観ないので」

「それが一番キツいわ！」

「じゃ絵で。

「ラッセン？」

「いや。だからあれは子猫二一なんで」

「ああ。」

「ぜんぜん、お好きな人はどうぞジグソー買つてトイレにお飾りになれば」

「いちいち棘があるんだよね」

「無いって。最高の褒め言葉のつもりなんだけど、トイレに飾るなんて」

「そおかあ？」

「えつ、だつて下半身丸出しで見つめたり見つめられたりするんですよ？ そんな秘密の小部屋

に」

「……やっぱりこのしと一応芸術家気質なんだよね……」

「もちろん本人が『いや俺のはエンタメじゃなくてアートだ』とか憤慨するかもしれんけど、本人の意識と世上の評価は何の関係も無いので」

「またそうやつて世界を斜め見る」

「真っ直ぐ観てるつて。俺がACミランの10番だって誰もそう思ってくれないじゃないか」

「まあそうだけど」

「なんかそのコンテンツに限つて本人の意識を尊重しなきやみたいな意識があるのがさっぱり理解できん。他のことでなんの敬意も払わんのになんでそれだけ不要に検討項目に入れるんだ」

「なんか歴史的経緯があるのかもねえ」

「代償行為だよたぶん。ビジネスの世界じやそうやつて何の躊躇いもなく人間を数値でしか測つてないのが人類にとつて心苦しくて、そこに投影してるだけだ。
まあそれはいいとして。どこまで言つたつけかな」

「そうそうそう。

そこまではまあわかつたさ。

で、それでなんでポンちゃんは、あの変な線と色の絵を描くの」

「で、だから、不意を突かねばならん、不意を。

そこは人によつて戦法に違ひがあると思うんだけど、というか、自分にあつた戦法を編み出しざり磨いたりすること自体が『修業』とか『鍛錬』と呼ばれるものだと思うんだけど、ビックリ

させないようなものであるふりをして手に取らせて、実はビックリ！」

「……」めんこれ言うと傷つくかもしれないけどポンちゃんの絵でビックリはしない」

「いや。

させてないのはわかつております。

だから作戦がヘタなのか自分に合つてないかなのです。

まことにあいすみません」

「いえいえこちらこそ。

どうぞおがんばりくださいませませ。

……でもさそんなことを言い出すと……ポンちゃん満足するような作品でほとんど無いんじや
ない？」

「うん、無いね

「巧いとかヘタとかじやないもんねえ」

「いやまあ、超巧いとかだと『神秘に触れる』という意味で若干揺るぶられることははあることはある。ウユニ塩湖の凄い景色をスーパー・ハイビジョンで観ればそりや生きてる実感がちよつとは湧くので、まあ、そういう方向でインパクトがあるものつてあるのはあるんだけど」

「それは、凄い現実、だねえ」

「そうそう。結局、それ突き詰めるとノンフィクション＆ドキュメンタリーになっちゃつて……」

それもアートだといえばアートだけど、俺のやりたい方向ではあまり無いね』

「にやるほどね。

うんよし一枚目下書きしゅーりよー。ポンちゃんはど……おわあ!!!」

はつ
はい
!?

なにかやつではいけないことをやつてます?」

卷之三

「なにを絶叫するかー！」

あつ、すいません、あの、はい、どうも

「だつてこれ、この、こんな超いいかんじのラブラブ模様なんて、これ、なにこの友情と愛情を入り混じつたような暖かな目線！ これ、これ男だから描けるつてことでSHOW!? 実感があるから、経験があるから描けるつてことで！ 相手は誰!? やっぱゼツツー!?」

違う違う、気持ち悪いから川崎とだけは想像するのやめてくれ

なんか出る

「出すな。頼むから」

「鼻水とヨダレと脳汁、どのがいい？」

「コントロール出来るなら出すなつて」

「イイナー。オトコノヒトイイナ！」

「普通に絵が巧いとか褒めろよ」

「巧い絵なんか意味ねーつて言つたくせに」

「いや……いやえー……」

「あーでもこれ凄いいわ。目がチカチカするぐらいイイ。ねポンちゃんあたしと組まない？
すぐアンソロデビューだよ」

「いやー、もうちょっとアートでがんばりたいんで」
「早い方がいいよ何でも。人生あつという間」

「いやー、はい、若いうちしか夢見れませんから」

「ねポンちゃんやつぱポンちゃん間違ってるよ。この胸に湧くパトス！ パッション！ リビド
ー！ これこそが、芸術だよ！！」

「まあ、喜んでいただけて嬉しいよ。作る方半分、受け取る方半分で。そつちでそうやつて盛り
上がつてもらう分には」

「こないだネットで見た記事なんだけど、LEGOって会社あるじやんブロックの」

「ああ。踏むと痛いんだよな」

「そうそう。あそこ経営傾いて、なんとかしなきやつていろいろもがいた結果、ある結論に辿り

着いて

「なんだろう」

「『好きか嫌いか』を正直に語るのは、子どもと酔っぱらいしか居ない」

「……いやーそれは慧眼だねえ。いやホントそう思うよ。あれおつそろしいもんでねえ、子どもわかるんですよあれ。ええ」

「ということで我々酔っぱらいが『ホー!』言つてしまふこの絵は、素晴らしい」
「ありがとうございます。

てことはあれか、始終酔つ払つとけつてことか」

「だいたい芸術家つてラリつてるかガキかその両方かじやん」

「ピカソとか倫理観壊れてるからな。

まああれだビギナーズラック。わけわかつてないから素直にコピーしたらしいかんじになつた
だけで、これ何枚も描いてると変な手癖出てきて良くなくなつてくんだよ」

「あーそれはあるかもねー。」

あたしが描くと欲求がね、ぶつけてしまう

「あそれね、良くないのよデッサンとかスケッチでもね、まず、まずは正確に書き写すところか
ら、ということで『守破離』は正しい」

「ただそんなこと言つてらんないよね萌えキャラ次々出てくんだからー」

「まあな」

「もつと早く描いてくれてればでつかく印刷して客寄せポスターにしたのにー」

「いやいや、こんなんじや寄つてこんでしょ」

「来る来る。絶対来るよ。だつてあたし来るもんこれ。あそーだ色も塗つてよ色もー！」

コピッ

クあるからー。色あんまないけどー」

「えー？ 僕マーカー使つたことねーから」

「百均で水彩絵の具買う!?」

「いやいやいやそこまでせんでええだろう」

「……しそこでの、おにえがいがありゅんだけりよ

「……はい」

「もういちまい……描いていただけませんでしようか……」

「……それで褒めてたのか……」

「いや！ マジでマジで最高の絵だと思うから！ こそその！ オハー！」

「ホントかよ……まあいいよ、今からそれペン入れとかすんだろ、俺も暇だし

「イヤツホオオオオオオウ！ ほいじやねほいじやね、この、このキャラと、このキャラの間に、

このキャラを置いて、奪い合つてる感じなんだけど、奪い合つてる一人は、恋人同士なの！」

「も意味わかんない」

「もわからんないかなこんな簡単な恋のトライアングルが。男の人つてダメね！」

「はい、すいません」

「いい、新しいこのお坊ちゃんはこのお嬢様のフリした子にちよつかい出すんだけど、この執事の存在が日に日に大きくなってるの。執事は、お嬢様のフリした子には愛憎始めいろいろ制約があるけどこのお坊ちゃんとはわりとフランクに付き合えるからまんざらでもなくてどんどん距離が近くなるの。でこの真ん中の子は、そんな二人の間を行つたり来たりすれ違ひあなたと私の恋いつかどこかで結ばれるってことは永久の夢～～～！」

「よつ、食人大統領。

わからんわ!!」

「わかんないかな……つまり日本を真ん中に中国とアメリカ」

「ああ、あー、よーわかった。最初からそー言え」

「やっぱ脳の構造が違うんだよね男と女じや」

「たぶんな。なんでそんな例えできたの」

「男のマンガヒヨーロンカの人がそんな表現してたの思い出した」

「あれ、なんかそんなマンガ無かつたつけ、なんか国を擬人化したような」

「あれ？ それだつけかな？」

「おま愛があるんじやねえのか」

「細けえこたあいいんだよ！」

「男らしいわ……へいへい、描きますよ描きます、メシ奢つてもらつてるし」「あしたもサーヴィスするわよ。

「フシシシシ」

「なんだよ何企んでやがんだ、いーよ別に」

「Boy.

「大人の階段とか、昇つてみない？」

「みない。ぼくいつまでもこどもでいー」

「まあ楽しみにしてて。きつとすつゞく、ステキなコトが起きるから……」

「起こすんだろ。いやもう変なことやめてくださいお願ひします」

「コミケ会場は周り全部変なんで、まともなことやつてると変になるよ」

「それでも俺はまともがいい」

「変な絵ばつかり描いてる癖に」

「お前に言われたかねー！」

「はい手動かす」

「くそー」

「その尻敷かれ体質が山葉さんがもう一步飛び込めないところなのよ。きつと彼女は、リードさ

れたがつてる」

「おま、あいつの強情さを知らんからそんなこと言えるんだ。俺が知つてる人間の中で一番の頑固者だよあいつ」

「春ちゃんのこと話してると本田君、すつごくイキイキしてる……」

「あーもーうぜーー描きませんよ!? これ描きませんよ!?」

「ああんウソうそん、お願ひんこれ売れるから売れるからん」

「結局お金なのね……お金だけの価値しか無いのよわたしの絵なんて……」

「その価値あつたら他に要らないと思うけどなー」

「……まあ、それで象徴してると言えなくはないなあ……」

「世知辛い世の中だよ」

「TPPで二次創作全部ぶつ潰されるまでに楽しんどけよ」

「クソが」

「デズニーにすりやこつちがクソなんだよ」

「誰があんな黒ネズミ描くか。ペスト野郎が。あれせつたい黒死病の祟りをお祀りするご神体だよね」

「三人に一人が死んだらしいからなあ」

「道真怖くて全国に北野天満宮おつ立てまくるのと同じ精神構造だよ」

「いや単に金だ金。プレー一匹で年間一〇〇〇億稼ぐらしいぜ。悪の組織JASRAC一年分。木助ならその何十倍だろ」

「まあじでええ!?」

「ラン先生頑張つてキヤラ作つて稼いでくださいやね」

「うーん……く、『くもマン』。赤と青のぴつちりした網目スーツで」

「完パクじやないですかしかも日米双方から」

「俺にオリジナリティやクリエイティビティを期待するなよ！ そんなもんあつたら二次創作なんかやつとらんわ!!」

「逆ギレきました！」

「これにインスピライアされてオリジナリティで作った同人誌が二次創作の一〇分の一も売れなかつた哀しみを君は知つていてるか知つていてるか雷電」

「一〇分の一はすげえな。客が」

「『これ、オリジナルですか？』『はい、そうなんです！』『オリジナルはちょっと……』オリジナルはちょっと？ TPP早く来て!!」

「だつてそれ鈴木が描いてるつてわかってるわけだろ？」

「鈴木が描いてるから買わねーんだよ。『どちらが描かれたんですか!?』『ランの方です』『ランさんはいいや』ニッコー笑つてランさん目の前にして言うからね」

「オタクスゲー。欲望以外見えてねー。

しかしそこを乗り越えるんだ。ストリートアートに出て一枚も絵葉書売れなかつた経験なら俺
にもある！」

「無理だよね」

「無理だよ」

「売れたほうがいいよね」

「いや、そこは同意しにくいけど、無理なのは間違いない」

「どうすればいいんだろうね」

「諦めるしかない」

「やる前から諦めるなー！」

「さんざんやつて諦めてんだよ!!

お前さんこそあれだ、書店で星の数ほどある四コマ誌かなんかに持ち込みなさいよ」

「いやあ……これ趣味でやつてるから楽しんだと思うよ。三六五日一日中これやつてるかと思う
とちょっととゾツとする」

「日本の漫画家の労働環境おかしいらしいからな。ましかしたぶん、プロになる人はそういう後
先考えない人がなるんだろうな」

「それはそう思うよ……ハイアマでいい」

「ハイアマな。ハイアマ……

俺もうちょっと頑張る」

「うん。応援してる」

「ありがとう」

「芸大とか受けるの？」

「いや、だから、さつきの理屈を応用すると

「ああはい理解、意表突けなくなるわけね」

「そうそう。音楽とか工芸とかならぬ、具体的な技術とかで習うものたくさんあると思うんだけど。絵はなあ……習得技術の必要なクラシカルなものはお好きな方がお極めになればいいと思うし

「茶筒とか描きたかないよね。

新谷かおる先生の『エリア88』でね

「あーなんか顔が少女漫画っぽいヤツだよな、戦闘機の」

「ポエムも載ってるしね。それでグサッと刺さったエピソードがあつて、あれ主人公たち空軍の外人部隊なんだけど、敵も外人部隊雇うの。歴戦の超ベテランジジイが隊長で

「ふむふむ」

「そのジジイが出撃前の最後の訓練だ、つて主人公たちの本丸みたいな大部隊ヘムチャ攻め仕掛け

けるのね、その時の命令は『生き延びろ』

「あわかつた、逃げるやつ出てきてそいつが正解なんだろ」

「言つちやわないでよー。そうそう、ほとんどの隊員が隊長にへばりついてくんだけど、重要人物のマックバーンたち何人かだけ下へ降りて時間つぶしてあとで合流するの」

「帰ってきたのは隊長一機だけ」

「そう！ 隊長の盾になつてみんな死んだの。

これ読んだ時あたし『社会つて怖ええ！』て真剣思つた。ひとつ何か流行ると、みんなそれ真似するの。で隊長を肥やして、自分は死ぬの。一番恐ろしいのはその判断間違つたと死ぬまで思いもしないこと

「違う、判断してないから死ぬんだ。自分で感じたり考えたりつてことを捨てたから、そりや死んでもしようがない

「キツイねー。でも、うなんなんだよね。みんななんであんなに隊長についていくんだろ」

「だから言つてるじやん判断したくねーんだよ。これ裏付けのない本田理論なんだけど、判断つていうのは脳がフル回転するから高コストなんだ、だから人間はなるべくそれをしたくない。で、それを前提に生存戦略を考えると、『みんなやつてることをやる』というのが最も低コスト標準リターンになる」

「その戦略の最大の問題点は『みんながやつてる』ことが間違つてゐる場合、レミンググつてこつた

ね

「そ、う、な、ん、だ、よ。低、確、率、か、も、し、れ、ない、い、け、ど『理、不、尽、な、破、滅』、つて、い、う、可、能、性、が、あ、る、戦、略、な、ん、だ。自、分、で、選、択、し、て、れ、ば、破、滅、し、て、も、す、く、な、く、と、も、納、得、は、可、能、性、が、あ、る、から、な。でも、人、間、は、こ、れ、を、選、ぶ。お、つ

か、し、な、話、で、あ、ん、た、炊、飯、器、買、う、時、に、『こ、れ、が、一、番、売、れ、て、ま、す、性、能、は、普、通、で、す、で、も、ひ、よ、つ、と、す、る、とい、つ、か、爆、発、す、る、か、も、し、れ、ま、せ、ん』

て、な、炊、飯、器、買、う、か、?」

「だ、か、ら、最、後、の、一、文、に、目、を、つ、ぶ、る、ん、だ、つ、て、」

「なん、で、つ、ぶ、る、ん、だ。一、番、クリ、テ、イ、カ、ル、な、こと、だ、ろ、」

「あ、た、し、に、怒、ら、れ、て、も、わ、か、ん、ない、わ、よ。ま、あ、自、分、だ、け、は、降、り、て、後、か、ら、合、流、し、た、い、わ、ね。……あ、た、し、教、育、つ、て、さ、ー、」

「ん」

「親、で、も、な、い、し、先、生、で、も、な、い、あ、た、し、が、言、う、の、な、ん、だ、け、ど、き、要、す、る、に、つ、ま、り、『む、や、み、に、隊、長、に、つ、い、て、い、か、な、い、よ、う、に、』、よ、く、自、分、で、考、え、よ、う、ー、』、つ、て、癖、つ、け、る、だ、け、の、こ、と、だ、と、思、う、ん、だ、け、ど、……現、実、は、逆、」

「真、逆、だ、よ、な、あ。隊、長、の、真、似、を、ど、れ、だ、け、巧、く、や、る、か、な、ん、だ、か、ら、……、い、や、ま、あ、ガ、ツ、コ、は、有、る、程、度、し、ょ、う、が、ね、え、け、ど、な。職、業、訓、練、で、も、有、る、わ、け、だ、し、」

「でも親も『人並みに』とか『公務員に』つて言うご時世なんだから、じゃ誰が教えるのそれ」

「『エリア88』だろ」

「……あはっ！ ははっ、そか。わすれてた。

あーガソリン切れてきた。追加注文していい？」

「燃費悪いなあお前」

「うん。家だと飴ちゃんとかチヨコとかチエーンでモリモリやれるんだけど」

「じゃ注文するつきやないな。ボテトとかつまみつまみ行くか？ それかやっぱスイーツ？」

「キムチチゲセット」

ひんぽーん

「……えーとすいません、追加で、キムチチゲセット」

「ライス大盛りで。卵は生卵で」

「と、バニラアイス」

「と、ビッグプリンサンデー。」

「……このような不斷の努力によりこのトランジスタグラマーは維持されているのです」

「前向きであることには賛成だが売買春を援助交際と言い換えることには反対だ」

「サモアやトンガじや栄養失調を疑われるレベルのガリですよあたしや」

「ここは、たぶん、日本」

「男なんてもういいの！ 私にはBLが……BLがあるから！」

「男じやねえか」

「四三過ぎて独身だつたらポンちゃんが貰つてくれるつて」

「なんだその中途半端な数字。てか俺独身かよ」

「いいよばるつべとなら一夫多妻でも。

あとポンちゃんの厄年開け」

「縛られないのか縛られたいのかどつちかにしてくれ。つか春とくつつけるな、つつーの」

「ぱるつペは超プライド高いから『私が正妻だから』とか思い上がりつてゐるのね。ここに付け入る隙がある」

「妄想を勝手にブーストさせるな。

マンガ家向いてると思うけどなあ」

「そか。この三角関係をオリジナルでひとつ」

「『この』とか言うな。そんな関係存在しねー」

「だんだん妄想と現実の区別つかなくなつてきたよポンちゃん」

「酔っぱらいですな。祭りの前日はだいたいそんなもんだ。しかもここ……」

ちよつと見渡すと、死屍累々というか、野戦病院というか。

「……みんな、凄いな」

「にやにおっさいますやらチエリーボーイ。あしたは、もつと、凄い」「へえ。期待しておこう」

「やんちやな新兵を見る古参軍曹の気分」

「ひー」

「死なないようにはしてやる」

「イエス・サー・イエス」

「サー・イエス・サー」

「サー・イエス・サー・イエス・サー・イエス」

「ポンちゃんも壊れかけのレイディオ」

「いいからちやつと仕上げてコピーして製本しましょ先生。もう、締め切りが」

「ああなんかかしずかれてるといい旅夢気分」

「別にかしずいちゃねー」

「これだ！ これがこのお嬢様役の子の気分！」

いまやつとわかつたわ！ よおおし、もう一ペ

→
追加!

「やめてー。来月、来月特集組みますから先生ー」

「巻頭カラーケれる？」

「カラ一面倒だからつて嫌がるの先生じやないですかー」

二二二

「夜中でテンション壊れてるだけです!!」

元」「さんいつもこんななの相手してるとか、あの子おとなしそうなのに偉いなあ」

……まあこれ。前回のウチうの二

「お。これを見せてくださいよー。どれどれ……」

鈴木先生のほのぼの四コマは絵柄が可愛くて普通に巧い。ただどこがツボなのか本編読んでないからわからん。と、絵柄が変わつて難しい漢字のペンネームが……これが元口さんか。

……うおつ。

「鎖、鎧、十字架。そして鞭」
「アンド薔薇」

「最後燃えてますよ画面全体的に。人も建物も」

「そして愛も。萌え＆燃えがウチらのキヤツチフレーズ」

「いやこれは燃えつていうのと……弾けてるな元口さん」

「ああいうタイプほどキレると怖いのよマーマレードボーカイ」

「ヘーカイ」

「……ぶつちやけどつちがいい？」

「本編読んでないから評価できません。どつちも単独で成立してないので」

「キツイなんだ」

「ぶつちやけろ、つーから。

ま、絵ならランのがいいよ。ちゃんと描いてる。元口さんは記号組み合わせ絵だから、俺
みたいのからすると魅力はないね」

「よし。

けどもつちゃんの方が絵もウケいーのよー」

「だろおなあ。そりやわかるよ。

まあれだ、ワタクシごときが言いますと単に負け惜しみに聞こえますが、しかし今宵は特別に、

特別に鈴木さんに宇宙の真理をお教えしよう

「大きく出ましたな」

「売上と、評価と、完成度の間には、それぞれなんの関係も無いから、気にすんな」

「いいねその諦め」

「この三者の間に相関関係や因果関係があるんじやないかと相當いろいろ研究したんだけど、俺の結論は『ない』だ。

だからまー、それぞれ自分がこだわりたいどれかめがけてまつしぐらでいいんじやないかな」

「完成度高いと評価高くない？」

「無い。」

いま言つたろ？ 鈴木の絵の方が絵としての完成度は何段も上だけど、元口さんの絵のがモテ

るんだろう？」

「まあ。けど……」

「関係無い。」

考えるな。絶対無駄だから。そんなことに無駄に人生使つたのは俺で最後にするがいい

「またも大きく出ましたな」

「ここになんか関係あると思い込むからスゲー労力を無駄に使って、なにか一つに邁進してると奴に負ける。まあそれはどうでもいいけど、肝心の製作そのものに曇りが出るのは避けたい。」

プリクラの最初の機種つてすごく画素数が少なくてさ」

「ほお」

「ボンヤリ写つたからこそ美しい人は美しく、それなりの人はそれなりに写つたからみんなが楽しめたんだ。この文脈でいうと、『綺麗に撮れない』つてことは弱点どころか長所だった。すべての要素は文脈、コンテキストに依る。売上や評価や、完成度と思い込んでるものも時代や社会に依つて立つてゐるわけだから、自分が独りで思い込んでいろいろ考えてることなんか、おそらく全部無駄だ。ましてその組み合わせとか関係なんかわかるわけねー。」

『出してみるとわかるん』

というのが正確なところだわさ。

「な・の・で、まあ愛を持つてこのキャラが描きたいという目標があるなら、それをやればいいさ。ウケるとか考えんでええ」

『まあでもウケたいよね』

「まあ、やるからにや、つてのはわかるけどな」

「ウケたけりやウケだけ狙えつてことか……」

「違う違う、ウケるかどうかなんかわかるんから、好きなように描け、つてこつた」「……ぱるつぺよくこんなキツイ男と付き合つてんな」

「だから付き合つてねーつつてるだろ」

「ホルモン焼肉屋で上ミノでポツキーゲームやつてる二人なんか金婚式カツプルだろおらあ。このデミ・ムーア！」

「エロカツプルを表現するのに『ゴースト』を持ち出す人最近居ないよ。俺は幽霊かよ」「男役の方の名前忘れたんだもん。

ロジャー・ムーア？」

「こないだ『TOP GEAR』でボンドカー特集やつてロジャー出てきたら超おじいちゃんになつてて夢ガラガラ」

「男前タイプは歳取るとキツイよねえ」

「ショーンはうまいこと歳取つたんだけどねえ。
あのな鈴木。マジでその妄想を外部に垂れ流すのはやめろ。俺はいーとして春が迷惑するだ

ろ」

「俺はいーんだ」

「いや……もう描きませんよ!?」

「すみません、もういいません。描いてください師匠。

けどそんじやーさー、なに、もの作る時のターゲットが無いじやんよー」

「ターゲット?」

「人間さー、やっぱウケたいとかさー、売れたいとかさー、褒められたいとかさー、感心された

い尊敬されたいつて思うからさー、どうしてもさー、それもまた燃料であることは間違いなくつてー」

「ああ。

うんまあだから適当にそのへんは各自持つて別によくて、ただ、『ウケ狙つて描きやウケる』つて思うな、つて言つてるだけ』

「えー。だーらー、じやどーすりやーいーんだよーおーおーおーおーぽんちゃんさんよー」

「そこで！

俺が応用したのが！

通称『安富ドクトリン』！

「ポンちゃんポーズは止めなよー。店員さんきちゃうよー」

「勢い付くもん。

安富歩という稀代の天才思想家が居て、あ、俺がこんなに人褒めるのはなかなか無いこつた

よ

「それ知つてる」

「この人が『創発』という、『人間の価値を生み出す力』について研究を重ねた結果

「ソーハツ？

『AKIRA』みたいなもんかね』

「あそーそーそー。で、結論が、このチカラがどのように生み出されどのように発揮されるか考えるのは今の人類にはたぶん不可能なほど複雑玄妙、簡単にいえば宇宙の神秘であつて」

「ふむ」

「そんなことを研究の結果、完璧に理解したうえに自由自在に使いこなせるようになる、なんてことを考えること自体が自然に対する冒涜であると」

「じやなに、つまりよーするに『おもしろいマンガが描けるようになる方程式』は無い、つてこと?」

「そのとおおおりハンター・チャンス!」

「キヨシとヒロシを混ぜないです。

じやどーすればいーの」

「で、考えられたのが、『創発』を阻害するもの、これはおそらく記述可能であつて、これを排除すれば、おのずから『創発』が発揮されるであろう。

こないだYouTubeで観たんだけどさ、九歳の少女が

「あー観た観たそれ観た。めっちゃくつちゃ歌うまいヤツっしょ」

「そそ。歌に限らないと思うけど人間にはすでにあんな才能がおそらく誰にも眠つてて、あとは

発揮されるのを待つてるんだよ。

ゴッホ九歳の石橋の絵つてのが残つてるんだけど、完璧」

「あたしたちやそれをギューギュー押さえ込んで、わざとヘタに描いてる、ってことか……」

「そうだ。

ガツクリくるだろー」

「……うーん、でも思い当たるフシが無いわけでもない。たまに描いてて辛くなることあんだよね。なんでこんな苦行みたいなことしてんだ、つて」

「だからそれは、描くべきではないものを描いてんだよ」

「……わかる。

でその、『阻害するもの』って?」

「安富さんは端的に『暴力』と表現してる。ハラスメント、強制力」

「ああ……なんとなく、だけどそうかもしれない、と思うねー」

「好きでもないキャラ描いて、って言われた時の何とも言えない感覚な

「わかる!? そういうなんよあれ困るんホントに! なんでも描けると思つてるからね素人さん!」

「俺こないだ親戚の子にプリキュア描いてくれつて言われて」

「ああ、ああ、んで変なの描いて微妙な顔された?」

「完璧なキュアエース描いて超大喜び」

「描けるんかよ」

「釘宮ヴォイスが聞こえてきそうなほど」

「わかつたから」

「愛の切り札ツ」

「わかつたつつてつだろ！」

「誰かこのマイクロ岡本太郎止めてー」

「ナノピカソとどつちがいいかな……」

こと創作に当てはめると、俺はそれは暴力に加えて、差別とか、あるいは物理的に見づらいとかそういうダメージ要件じやないかなあ、と思つたりする。ちよつと言葉にしづらいけど

「ああでも同人誌でやつちやいけないことつて、そんな感じだね。

差別的表現、あまりにも露骨な暴力と性……要は隠されるもの、それと物理的に印刷が薄すぎるとか汚れてるとか乱丁落丁誤字脱字」

「逆に言うとそれ以外はなにをやつてもいいと思うんだ」

「ああ……」

あれ？

いやだから、酷いこと以外何してもいいってのはいーんだけど、じやなにをターゲットに」

「そりや主題、テーマだろ」

「テーマ……テーマなんか考えたことないツス」

「これ、このキャラ達可愛いなあ、ずっとこの世界で楽しんでいたいなあ、でいーんじやない

の？」

「それでいいの？」

「それ以外の何があんだよ。

「俺の絵なんかもつと無いよ？」

「あれ、でもそれ『子猫二一』に戻つてない？」

「いや。伝えたい主題があつてそれを衝撃的にぶつけてるんだから、芸術だろ」

「え、だつてこれエンタメつて……えー……」

「つまり『子猫二一』も極めれば芸術つてことで」

「いやそれは言葉遊びだな納得できないな」

「分類すること自体が無意味で恣意的な行為なんだから、いつでも解体すりやいいだろ。

鈴木がこのキャラの可愛らしさを誰かに衝撃的に訴えたいと思つて描いてりやそれは芸術だし、ただ自分自身が楽しい絵を描きまくつて本にしたいという欲望に従つてるだけならそれはオナニー同人誌だし、呼び方どうでもいいじやないか

「じゃアートつて言つていいのこれ」

「もちろん。本人以外誰にも否定できん」

「あーなんかジゴロが無茶苦茶な理屈で口説いてるみたいで気持ち悪い———」
「失敬な。

ラン、これは、素晴らしい、芸術だよ！」

「うわあー綺麗可愛い美しいって言いまくるバカみたいで氣色悪い————！」

「君は本当にワガママレイディだな。

しかしそんなところがボクの恋心を燃え上がらせるのだよ」

「ゲロゲロゲロゲロゲー！」

「ホントに吐かないでくださいよ先生」

「カモ茶アイスで作つてきて。キモチワルウで」

「そりやこの時間にキムチゲとプリンサンデー一緒に食べりや気持ちも悪くならあな。かもち
や？」

「カモミールティー。」

「あやつぱコーラゼロ」

「ほいほい」

「あやつぱ普通のコーラー」

「へいへい」

——ゲビゲビとコーラを流し込みながら、鈴木先生はなんとか原稿を完成させた。長年お世話を
になつたファミレスを後に、コンビニに向かう。幸いにも遅いからか列はなく（並ぶ時もあるら

しい）五〇部が刷り上がる。

「……五〇も刷るんだ」

「何言つてますかウチなら一〇〇でもヨユーで捌けますぜ旦那」

「やるなあ、ビッグサークルですなあ」

「なかなか捌けないつてよく知つてるね」

「絵なんか売れやしねえってこたよく知つてる」

「売れやしないよねー」

——と、どうでもいいことを話してゐうちに部屋に着いて問題はもちろん解決していない。

「……しようがねーな、下のロビーで夜を明かすわ」

「えー悪いよお、あたし全然かまーないよ?」

「いやー……なんかね、んー、男の美学だと思つてくれ」

「じゃあたし下行くよ」

「いやそりやおかしい。あんた明日が本番なんだから」

「うんそう言うと思つて一応」

「コヤツ！」

「じゃあたし上」

「上？」

「ぽんちやんの上で肉布団になるよ」

「悪い夢しか見んわ。

まあホント気にはんな。変などこで寝るの慣れてるし
『ゴメンねー。お詫びにドア閉めて出てつたら枕に顔埋めて『……いくじなし』って囁いたげ
る』

「勝手に言つてろ。

明日何時集合

「六時ー」

「はやつ。ま、早い方がいいか。

「そいじやーなー。明日製本手伝うからもう寝ろよー」
「うーい。いくじなしー」

「おやすもー」

「……おやすまん……」

ドアの隙間から見えた鈴木は、ダブルベッドの真ん中でぶつ倒れるところだつた。
やれやれ。

——ビジネスホテルにしてはそこそこ広いロビーにはそこそこのソファがあつてそこに身を委ねて腕組み半眼。なんといつても都合よかつたのがここでまだ作業してゐる人が三組ばかり……
すげえな、みんな。

部の発表でも最後へタレで出さないヤツがいたりすんだけど、爪の垢煎じて飲ませてやりたいよ。

まあ気持ちはわかるんだけどね。でもできあがらなきや何もはじまらんから、そこはなにがなんでもでつち上げんとホント全部無駄になるんで……

とか独り言ちつつ携帯のアラームをセットした瞬間、落ちた。

——まだ寝てるかな、と躊躇せんでもないが俺はタイムスケジュール知らんので起こす。

コン・ココンココンココン。

「はーーーい！」

ガチャ。

「ポンちゃんおはよーー！　ごめんね昨日はホントにーー！」

「いや別に……ておおい！　なんてカッコだよ！」

バスローブ一丁。

胸でけえんだよコイツ。目のやり場に困る。

「お風呂入つてたから！　お湯沸いてるよ！　ちゃんとお湯も換えたから入つて入つて！」

「え、いや、あー……いただきます」

さすがに冷えた。風呂はありがたい。

……このユニットバスつてなんでいつまでも脱衣のことを考えんのだ。棚ひとつふたつ作るだけだろ。

「少しばは寝れたー？」

「ぐーすか寝たー」

「さつすが部室宿泊率をウチと争う美術部！」

「しかしじスゲーな、あの時間まだ原稿やつて人居たよ」

「もうテンションおかしくなつてんだつて。あ、お風呂あがつたら裸体で出てきてねー」

「なんだそりや。ヌードデッサンか」

「朝から男体盛りはせんわ」

「んなこと言つてねー」

痺れがとれる程度にあつたまつて、さすがに下着はつけて、出た。

「……ほーい、これでいーかー」

「オッケーイ！　じやこれ着て！」

「は？　てかおわあ！　スゲエカッコだなおい！」

鈴木は全身超ロリロリのピンク甘甘ドレ……あ、これつて

「まさかコスプレ⁈」

「そ！　『俺おじよ』の！　あたしお嬢様ポンちゃん執事ー」

「ヤだよそんなの恥ずかしい！」

「大丈夫だよ執事ファッションドから！　燕尾服みたいもんだから！」

「こんな殺風景な海浜地区燕尾服で歩いてるのがおかしいだろ」

「あたし横にいるから完璧コスプレだつてわかつから」

「いやわかりや恥ずかしくないつてわけじやないだろ」

「女の子に恥かかせる気!?」

「なんのキレイだよそれ」

「あたし一人コスプレじゃもつと恥ずかしいじやん」

「いや……えー？ それ脅迫じやねーのー？」

「もつちやんだとお坊ちやまの方やる予定だつたんだけど、慌てて変更したんだぞ、半ズボンに

蝶ネクタイは嫌だろうと思つてー」

「なんで恩着せがましく言われにやならんのだ。ま確かにそれはヴエテラン芸人みたいで辛い

が」

「……でもハイソックス似合つたかな……ぴつぴつの短パンで七三分けのポマード頭を」

「着りやいいんだろ着りや」

毒を食らわば皿までだ。

もう親戚の結婚式にでも出ると思つて。

「ふふ。二人の結婚式みたいだね」

「うるさいよ」

「こうやつて執事コツコツ虐めるの。お嬢様役の子」

「それ完全にプレイじやねえか」

「そうなのよ要するに周り巻き込んでずっとイチャイチャしてる話なのね」

「まあそういうのつて延々終わらんから連載続けやすいんだよな、『めぞん一刻』とか」

「古つ」

「『おもしろい』に流行も、流行遅れもありません！ ミスターードーナツツ!!」

「……でも似合うめっちゃ似合う。

やつぱあたしの目に狂いなかつた、ポンちゃんにピッタリだこの優柔不斷でか考えすぎて空回りしてゐるところ

「悪うござんしたね」

「あたしどおお？ 小動物っぽいところがぴつたりでしょ？」

「小動物つーかポケットモンスターつて感じだけどな」

「照れるな」

「照れてねえよ！ おまどうやつたらそく自分に都合のいいように都合のいいように解釈できん
だよ！」

「日本の学校教育をまともに受けてないからね、性格が歪んでないんだよ」

「受けろよ！」

「……あれ、複雑な家庭事情とか、あつた？」

「ううん。絵に描いたような中産階級だぜウチ。小中皆勤」

「不必要に元気だなオイ」

「バカは風邪ひかんからな！」

「羨ましいよ」

「だつて先生て教科書に書いてあることしか言わないじやんそんなバカの言うこと聞くヒマ俺の人生には無い！」

「日本中の先生方に怒鳴り込まれるよホントに」

「師走だしね」

「仕事だから、それしか教えないのは」

「だつたら家で自習すりゃいいじゃんかー」

「なんだお前昨日から学校に恨みでもあんのか」

「特に無いよー。授業中ヒマだからいっぱいマンガ描けたしねー。」

「……よし、こんなもんで！」

「行くよ、マーヴエリック！」

「マ、マー？ 僕の名前？」

「うん。あたしはジョセフイース。本当はジョゼ。場面によつて使い分けて。公的な場ではキツ目に冷ために『ジョセフイースお嬢様』、プライベートでは甘い囁きため息混じりで『ジョゼ：：』」

「そんな高度なことできるか」

「やりもしないで諦める、そういう人間が一番つまらん」

「西堀栄三郎出されると弱いな……わかりました頑張ります……ジョゼ、お嬢様……」

「ジョゼの時は男の子！」

「ああもおめんどくさい！」

「めんどくさい方がお金が儲かるんだよ、官僚に士商売ぜんぶそう。不要に面倒にして手間貰掠め取る」

「おまえ日本のシステムに相当恨みあるな」

「無い無い。ジミントーサイコー」

「ヨダレ垂れてる、ヨダレ」

「七時にメシ始まるから席取るぞ！」

「行くよマーヴエリック！」

「はいお嬢……じゃない、ジョゼ……ハー」

「ため息つくな。これから出陣じやぞ」

「お前がつけつつつたんだろ。

このバカデカイトランク何入つてるんかと思つてたらこれだつたんか……」

——チーン。

エレベータ降りた瞬間から若干後悔した。

視線超痛い。

観た人顔ほころぶのがまた辛い。

なにこの作品そんな人気作品なの？

「席とつといてあたし『飯取つてくる！』

「うい頼む。あ、和系で」

「ほいさ。……あ。違うわ。いまジョセフィーヌとマーヴエリックだから」

「ハ？ ……えー？ ロールプレイもやんのー？」

「『病は氣から』だよ、ポンちゃん」

「ヨレヨレ。

……えーお嬢様どうぞこちらでお待ちくださいませ。わたくしが朝食を『用意させていただき

ます」

「ありがとう、マーヴェリック」

「……あ、あのすいません！『俺おじょ』のお二人ですよね！」

「あ、はい、いや、あの」

「写真、いいですか！」

「えー」「ハイもちろん！……こういう感じ？」

「ハイ！あの、執事さんの嫌がり方とか最高です！イメージぴったり！」

実写版に推薦した

「あ、ども……」

「ウチ、東5のボの二七なんで、来てくださいね！」

「はい、絶対行きます！」

「……あ、あの、私も一枚！」

「え、えー」

「そのあとこつち目線お願いします」

「はーい、順番にお願いしますねー」

メシ食えるのかわしら。

てかこれ一日続くのか。

なんとかおにぎりとクロワッサンと焼きそばと味噌汁となんか小物を腹に詰め込んで、コンビニで昼飯とお菓子と水分を買い出しして執事はそれを持つ。わりと重い。

駅で電車待ちの間にも声掛けられて写真撮られて……囁く。

「……鈴木うまいな客あしらい」

「年季入つとるわい。つーかポンちゃんが決まり過ぎてる。夏もこれ着たけどこんな反応無かつた」

「そうかねえ」

「ジエリーだけじゃダメなのよ、トムが居ないと」

「わかるようなわからんような」

「ネズミいっぱい居るから」

「いっぱいではないと思う。巨砲がそそり立つてただけで」

「……そだね。ネコのがいっぱい居るね。フェリックス、ガーフィールド、マイケル、キティ、ひこにゃん、あずにゃん」

「ドラちゃん」

「あれは家電じやん」

「ロボットにもなんか恨みありそうね」

「愛する家庭の家事は、わたしが独占したいな日をパチクリ」

「ミリも思つてねー」

「猫型ロボットつて本人が歌つてんだからロボットじやんかー」

「ロールプレイロールプレイ」

「いまプライベートモードー」

――とかなんとか言つてるうちに国際展示場最寄り駅について……つておうい。
なんか人の道が、黒い頭の絨毯みたいなのが、建物の入口向かつてぶおーつと……

「……これ、なにさ」

「スゲエだろ」

「えつ、ちよつ、これ」

「サークル入場の方はこちらでーす！ 左へ左へお進みください！」

「こつちこつちこれこつち、あたしたちは」

「ひやー……これ並ぶのかと思ってやな汗搔いたぜ」

「みんな並んでるのよこの寒い海風吹きすきぶ中早い人は徹夜でー」

「死ぬじやん」

「死なんのよこれが。燃える心があるから」

「夏はどーすんだよ」

「心頭を滅却すんの」

「人間つて便利だな……そこまでせんでもええやろう」

「お祭りは、どれだけ、『そこまでせんでもええ』ってことをするか、だから。

でなきやだんじりや御柱祭で死人出ませんて」

「しかも当局黙認だからなあれ。俺昔それをトリックに完全犯罪ミステリを書こうかと思つた

「ドサクサじやん。ミステリでもなんでもない」

「だから止めたんだよ」

——なんか妙に延々歩かされて、やつとこさつとこブースに辿り着いた。足元にはかなりでかいダンボール二ヶ。これが新刊てヤツか。

「……なにすりやいいの……ですか、お嬢様」

「ええ、まずはマーヴエリックには宅急便の受け取り、それから次回申込用紙の購入を。わたく

しは設営をしておりますので」

「承知いたしました。……受け取りつて、なんか控えとかあるの？　えー、あるのでありますよ
うかお嬢様」

「あ。え、ちょっと待つてえー確かに封筒に入れといたはずでえーどこだ封筒？」

「お嬢様そんなに慌てられなくても」

「いやマズイマズイ、控え無かつたら設営小物が」

「お嬢様ガニ股でいらつしやいます」

「ロールプレイ止め、めんどい！」

「承知いたしましたお嬢様」

「あでもお嬢様呼ばわりはしてもいいのよ？」

「いいから控え探せよ鈴木」

「ドSだー！　この執事ドSだー！」

「もーこつちじやないのか昨日画材入れてたトートー」

「あ！　それだ！　そつちそつち！」

「……ほらあつた！　さつすがマーヴエリック！」

「先が思いやられるよ」

「大丈夫大丈夫安心して。あたしいつも元口つちゃんに全部まかせてたから！」

「その前歴で俺はどこをどう安心したらしいんだよ。宅急便受け取りつてどこだ」

「えーちよつと待つて待つて、ここに書いてあ……あ！ 参加用紙が！」

「あーもーこの紙だな、見とくから片付けろ」

ザバザバザバザバザバザー……：

机の上の山のような業者チラシ、派手に床に散乱ス。

「……設営俺がやろうか？ 宅急便受け取り行く？」

「えーだつて荷物重いもーん。

ボク、スタイルスより重い物なんか持てない」

「わかつたそれもやるから次回申込用紙とやらを買つてこい」

「あーい」

ドタバタジタバタと設営がなんとか済んだ。鈴木と元口のサークルは新刊とやらを毎回一冊出して売り切るらしくて、既刊の在庫が無い分シンプルで良い。

新刊はなかなかカツコイイぴつかぴかの印刷だ。すげえな同人誌。あれこれPPコートもしてんじやん。なんか特色だよねこのピンクとか。えー凄いなあ、金掛かってんなー。こりやそりや

一〇〇〇円で売るわそりや。

しかしやつぱ元口の絵の方が正直表紙にはいいよな。使い古された表現だけどシズル感があるつてヤツだ。んで開けるとまず鈴木のほのぼのがあるので気分を温めて、ほっこりしたところでいよいよ元口の……わあ、また鎖・鉤・十字架だ。そして薔薇。まあしかしよく出来る。

新刊と、昨日描いたコピーブック……ホチキスせんと。

「……ぽん吉、ちょっと悪いんだけど製本お願いできる？ 挨拶回り行つて来たくて」

「この作品さー、やつぱおかしいつて。キャラ全く安定してないじやん」

「だからウケたんだと思う。どんなキャラ描いても怒られないから。アイドルのカラオケと同じ！」

「そおかなあ。

てか挨拶とかそんな風習あるんか」

「別に行かなくてもいいんだけどやりとりあるとね、気分盛り上がるし。あもし誰か来たら挨拶行つてますつて言つといて。スケブは受けちゃダメよ」

「すけぶ？」

「スケッチブック持つて来て描いてください！っていうの。ウチだいたいもつちゃんだから今日

受けても描けない」

「なるなる。了解」

「抱えの新刊をトートに突っ込んで出発したお嬢……鈴木を見送つて、かちやんこかちやんことメカ部が九〇度回転するホチキスで二枚のB4中綴じる。

これ便利だな一個欲しいな、使い道は思いつかないけど。

「すみません、実行委員会の者ですけれども、本日はどうぞよろしくお願ひします」

「あ、はい、どうも、よろしくお願ひします」

「参加カードと新刊の見本誌をいただきたいのですが……」

「あ、えと今主幹が外出してて……いやえー参加カードさつき見たな、えーこれですか」

「あはいそれです。あ、ここ判子かサインを……」

「あ、えーと、えー……スズキ、と」

「はいありがとうございます、で見本誌の方……」

「えーと新刊ですね、えー……これ！」

「……あの、見本誌シールを貼つていただきたいんですけども」「へえつ!? え、えと」

「あ、シールお忘れでしたらこちらにありますのでここにご記入を……」

「あ、はい、え、受付番号？　えー」

「あ、それはこちらの参加カードにありますので」

「あはいすいません、えーと……」

サークル『ローズ&リリイ』。

欲張りなサークル名だなおい。

「……ありがとうございました。

では本日一日、がんばつてください！」

「はい！　そちらも！　ご安全に！」

鈴木一。

だいじなことから教えといてくれよーう。

と思つてると、帰つてきた。

なんかトート一つ増えててどつちもパンパンに膨らんだる。

「いやーごめんごめんやっぱこの服威力抜群でさー」

「だらうなあ

「どこでも『あとから執事連れてきます』って言つちやつた★
「おうい」

「まま、休憩がてら休憩がてら。ハイこれ静岡のお茶だつて。差し入れ貰つた
「センキュ。……差し入れかあ。つーか立派な先生様じやん」

「まあたしげ」ときがそーゆー気分が味わえるのも即売会の醍醐味よ！」

「謙虚性があるうちは健全だな。

あなんかスタッフの人來たぜ」

「あホント!? 見本誌シール書かなきや！」

「テキト一書いて出しといた」

「ホントに!? うわあ助かるー。次の夏も一緒に出ない?」

「元口と出してくれ」

「三人で三人で。トライアングル・ラヴ！」

「それ好きだなお前」

「押し合いへし合いはドラマの基本ですよ、むしろそれしか無いと言つてもいい」

「おう、ドラマツルギーについては俺あ素人だ、聞かせてもらおうじやねーか」

「そんな大層なもんじやないよ、

『あ、なんとかなるのかなー』

『なりませんでしたー』

『あ、今度はどうにかかるのかなー』

『なりませんでしたー』

『この繰り返し』

「また大雑把だな」

「『24』とか『冬ソナ』とか全部そうだろ！　あと『めぞん一刻』

「ちくしょう。良い物は良いんだ！」

「響子超ビッヂやねえかあんなヤツ」

「俺の響子さんに何を言う。CV島本須美つてだけでピュア・プリンセス・ヒロインなんだよ！」

エターナルに！」

「お前のじやねえ。現実を見ろ！」

「見たかねえからアニメ観てんだろうが！

しかし開場一〇時つーと結構あるな

「挨拶回り結構早く済んじやつて。もちよい遅くても良かつたねごめん」

「いや、いーんだけど別に。

……まあしかし確かに連載ものとかは押して引いての繰り返しのようにも思えなくもないなあ

「脚本家には二種類居て、ブロックの仕上げが巧い人と、全体として興味引つ張るのが巧い人と居るね」

「ほうほうなるほど」

「あたしどつちかつてーと一塊小粋にまとまつてる方が好きなんだけど、もつちゃん逆なんよ」

「ああなんか描いてるものそうだな」

「そそ。

なんかもーいいところで『次回へ続く』が出ると『あー！』とか喚いて裸で走り出したくなる。

男なら『水戸黄門』だろ！」

「あれ『お迎えが来るかもしれないから止めてくれ』って言われて二週連続物はやらんらしい

な

「年寄りだけじゃないよ死すべき運命にあるのは。ね？」

「はは。そうね」

二人ぴつたり並んで座つて壁の方を見ている。壁の方には人山ができるつつある。

「……あれ、なに？」

「ああ、買い物の列」

「まだまだ開始まで時間ある……ってか自分のサークル開けていいんか」「サークルチケット三枚あるから、譲つてもらつたりした買い物専門客がほとんどかも」「へーっ。

客も凄いがサークルも凄いな、あれ捌くんか

「もちろん。酷いところだと一日中それが続く」

「ウゲー。何冊ぐらい出るの」

「さあ……三千とか五千とか聞くけどやつたこと無いから知らん。人のこと興味もないし」

「ああなりたい？」

「追い立てられるみたいでヤだね」

「鈴木嬢は意外に理知的ですのう」

「酔つ払つてるのはマンガ描く時だけでいいよ」

ジョセフィーヌは腕組みをした。

「……あたし昨日寝ながら考えたんだけどさ」

「器用だな」

「ん。

昨日ポンちゃんが言つてた『ビックリ』つて、難しいね

「だろう。たぶん芸術家は一生掛けて自分のビックリ作戦を練るんだ」「てかむしろ奇跡が起きて神様が降りてこないと無理かも」

「……うーん……降りてくる?」

「たまーに。

『うわ、これあたし描いたの?』

てことはあるよ確かに。そんときつて、自分も驚いてるぐらいだから人も驚かせることが、できるんじやないかな。

ない? そういう時

「……無い、わけじや、ないな」

「だから芸術家はお酒飲んでね、ヒロポン打つてね、博打で興奮してお金無くしてピンチになつてね、オンナかオトコか引っ掛けまくつてね、こうとにかくテンション上げて、神様降りてくるのを待つわけよ。シャーマン」「いや。

それは抜本的に手段と目的が入れ替わってる。降りてきてもらうのは目的じゃない、降りてきたものを表すのが目的であつて

「降りてこないとはじまらないと思つちやうわよそれじや」

「……んー」

「もつちやんもだんだん筆が遅くなつてきてさ。今回も最後締め切り無理してそれがたたつて体調崩したみたいで」

「ああ……わかる」

「一発クると、またあれが来て欲しい、来ないと、つて、思つちやうよねー」

「いやでもわかるんだけど、それは、違うんだよ。なんていうか……もう降りてるんだ。表せないだけ。だから表わせるように阻害要因を取り除く」

「なんとかドクトルマンボウだつたつけ。

『あそその北杜夫センセがさ、それ最初のそれで言うのんよ、

『俺はまったく役に立たないことだけ書く』

つて宣言するの。あの人お父さん茂吉で東北大医学部の超インテリだから、『役に立つこと』書

こうと思えばなんばでも書けるんよ』

「でもそうじやない、実は、そんなこと考えてると、どんどんどんどん領域が狭くなる」

「つまんないことだけ書く、と宣言するぐらいでないと、すぐ何も書けなくなる、つてことね」

「そう。

「一個しか書けなくて消えちゃう人、つて才能が枯れたんじゃなくて、一個書いて書けちゃつたり当たつちゃつたりすると」

「そのまわりばかりぐるぐる回っちゃうんだよね。わかる。うんわかる。ギヤグも同じ系統繰り返しちゃうよね」

「そそ。元口に言つてやれ。

いいもの描こうとすんな、くだらないもの描こうぜ、つて」「けどもっちゃん真面目だからなー。わかつてくれつかなー。

しかしそー考えると井上雄彦先生の『スラムダンク』の次が『バガボンド』つてのは凄いよねえ

「天下の井上雄彦が天下の吉川英治原作の天下の宮本武蔵のマンガ描きたいつて言つては断られまくつて『バスケのマンガ描いてくださいヨオ』つて言われ続けたこともスゲーけどな」

「営業つてのは売れてるものを作りたいんよ。そういう人間でなきや営業なんか務まらんわ」「なんで」

「自信持つて薦められるじやん『今売れてます』つて。責任自分にないから」

「怖いわ鈴木さん」

「世の中つて世知辛いわよ。それが世の中」

「……さつきからなんかいつになくシリアルだな」

「うーん……

いや考へてるんだけどね、いやひょっとすると間違つてたのかな、と」

「はあ」

「しょせんポン吉の言うことだから信用しなくていいんだけど、ポンちゃんの言うこといつも
グサツと来るんで、つーか来た、んで考えこんじやつてるわけなんで、これ非常にマズい」
「……なんかマズイこと言つちやつたわけ？」

「うん。

あたしの作画・作劇技法のひとつ目の目標として『炭取りを回す』てのがあつて

「はあ。すみとり？」

「昔の囲炉裏端に置いてあつた行平鍋みたいな道具。あのね、柳田国男の書いた怪談話を三島由
紀夫が激賞してて」

「ビッグネーム二つ揃いましたな」

「江戸時代で、女の幽霊が出て、囲炉裏端を歩いてくるのこつちに。その時その幽霊の着物の裾
が炭取りに引っかかって、くるくるつとその炭取りが回る。」

この描写一つで、その幽霊が読者の目の前に浮かび上がる。その世界その物語全体がぐつとり
アリティを持つてこつちに迫つてくる、こういうものを小説というのだ、と三島センセーが」

「ははあ。なるほど」

「あるいはまた近松門左衛門師匠が」

「またさりにビッグネームだな」

「『虚と実の皮膜のうちに芸がある』 とこうおっしゃる。

これつてつまりさつきの例でいうと幽霊というフィクション、虚構と、囲炉裏端というありうる現実と、この間を繋ぐものが、『炭取り』」

「ふむふむ」

「だーらあたしや、ずっとこの『炭取り』的なものを描いて、これを回さねば、と思い続けて、

きた」

「ほほう。鈴木のあのふわふわ四コマにそんな歴史が」

「ま実現できるかどうかは極端に怪しいんだけど。ま目標として理想として。

……けどね、昨日ポンちゃんに『ビビらせろ』って言られてその瞬間なんかチクッとこう来て

て
「ほい」

「……そこ、繫がない方がいいのかな」

「え、なんでなんで」

「ポンちゃんハゲデブチビメガネアブラ親父だとしてさ」

「えらい翻乗つたなこれ」

「仕事に疲れてキヤバクラ行くのよ。そこで『お父さんこんなとこ来てちやダメでしょ』て言われたい?」

「言われたかねーなあ!」

「でしょー。まるでこの世の王様かのごとく扱つて欲しい、よねー」

「そういう期待持つて行くとこだしねえ。いや行つたこと無いんだけど」

「注釈つけなくともポンちゃんそういうとこ行く人じやないつて知つてる」「そんなに実は真面目キヤラにちゃんと眞実が見えてます?」

「恥ずかしがり屋だから。

それはいいとして。

つまりそのー、『子猫ニー』の方向つて要するに夢を見る方向だからさ、虚構どつぶり浸からないとダメで、その場合炭取りは無い方がいい

「え、だつて虚構に浸かるための小道具だろ」

「違う違う、だからキヤバクラ来る人は最初から浸かりにわざわざ来てくれてんだつて。そんな人に現実を示唆するようなモノは要らないじやん」

「ああ……ああ?」

「で逆にー。現代美術展見に来るような人はー。ピックりさせて欲しいわけでしょ要は。ということは、最初から現実と虚構のギャップを意識に乗せて来てるわけで、そんな人にもわざわざギヤップを示唆するなんてまどろっこしいブツは要らない」

「うぬーー」

「現実問題として、あたしのはコアなファンがほんの少し居てとてもクールに喜んでくれるんだけど、もつちやんの方がずっと数多いんだよね、ファンがね、で喜び方が違うんだよね、なんとなく。あそудイズニーランド」

「あまあ騙されに行く虚構の国ですわね」

「そそそそそ」

「いやでも必要無い、つてのは言い過ぎじゃないかなあとと思うなあなんとなく直感で。ぱつと考えただけじやよくわからんのだけど、俺その三島の理屈は非常によくわかるし正しい気がする」「別に間違ってるつてわけじやないんよ。

「ただ……ひよつとすると現代日本では、必要ないとか、使わない方がいい、とか」

「近松はともかく三島の時代とならあんま変わらんだろう」

「わかんない。

「ただ、あたし的に軸にしてた作戦がいまグラグラ揺らいでて、なんかちょっと困惑してます」「……それはすまんことをした」

「いやすまなくはない。

これ間違つてたり意味が無かつたりしてたら早く方向転換した方がいいよね」

「しつこいようだが間違つてはないと思う」

「うん、間違つてはないのよね、たぶん。

「そうなんだけど。
けど効果的かどうかとか、現実的かどうかとか、は、また別問題」

「なんか悪い気がしてきた」

「なんよ昨日は自信満々に傲然と言い放つてたくせにー」

「人の人生左右するかと思うとビビるじやんか」

「別に人生の問題じやねッスよ」

「これで鈴木が目覚めてマンガ家への道を突き進んだら俺の一言が

「無い無い。つーか、そうなつたら、それは……なんだろ、それはキツカケであつて、そうなる
ようになつてた、つてことで」

「まあそうなんだけど」

「うーん……びつくりさせる、びつくりさせる……うーん」

「ヒントになるかどうかわからんけど、その安富先生が言うには、マイケル・ジャクソンは
「パオ！」

「圧倒的なダンス・歌・曲でみんなをボーッと酔いしれさせて、詞はかなりストレートに問題を抉る」

「ボウ？」

「『Smooth Criminal』って曲は聞いたことあると思うけど」

「えー……どうかな」

「あとでTube開いて聴け。絶対聞いたことあつから。これは最高にカッコイイ曲なんだけど、詞の内容は『アニー、大丈夫?』って繰り返すばかりなんだ」

「なんじやそりや」

「アニーのがアメリカで救急手当の訓練に使われる人形のことで、つまり我々はスマーズ・クリミナル、世界を滑らか動かそうとする力によつてまるで人形のように感覚のない日々を送つてしまつてゐる、だから『大丈夫ですか!』と」

「へーやたら奥深い」

「こんなもんが世界中で超ヒットするわけさ。子どもたちが体四五度前に倒すダンスみんなで真似してね。

こんな『人間味を取り戻せ』なんてお説教、真正面から聞いて楽しめるわけないはず、じやん。でも人間どこか圧倒的だとそれに目を奪われて別のどこかが意識から落ちるんだよ。マジックのネタと同じで。

MJのイケてる踊り観てると何言つてるかとかどうでもよくなつて、しかし聞いてるわけだから、無意識には刷り込まれていく」

「すげえなあそれ。

「けどウチにはぜつてーできねー」

「まキングだからなあ。キング・オブ・ポップ」

「ワールドクラスならではだねえ。」

「うーん……」

「俺たちは仮面を被るわけさ、人とコミュニケーションを取るとき」

「被るね」

「いま鈴木だつて俺用のを被つてくれてるんだろうし、俺も鈴木用のを被つてる。これでコミュニケーションがスムーズに行われるわけだけど、この仮面が時に邪魔をする」

「やり過ぎると仮面なのか自分なのかわからなくなるよね」

「そうそう。古来よく芸術のモティーフにされるけどな。特に文学」

「マンガでもよくやるよ」

「だから真正面からテーマぶつけると、この仮面が適当に自動処理して、『本当の自分』に良く

も悪くも届かないんだよ」

「良くも、つてのは?」

「ソマリアの子たちが飢えてるとかいつも気にしてたくないだろ……正常性バイアス」

「なるほど」

「だからこの仮面を突破する作戦、これを考えださねばならない、われわれは。

それぞれのやり方で、それぞれのテーマや個性に合つたものを」

「子猫に地球温暖化でも訴えさせるか」

「まあ戯画化して言えばそういうこつた。ただしそういう作戦で来てるつてことがバレてはいけ

ない」

「おねえ。

あ、そこで昨日ダメだつつてたのが、『それっぽい』つていう

「そうそうそう。実は何も言つてないのに言つてるようなフリをしてて、受け手もなんか受け取つたようなフリをする、これが非常にマズイよな」

「マズイねえ。コミュニケーション自体の信頼を損なうねえ」

「空箱ばかり開けさせられたら、箱出してもまた空箱かと思われるし」

「ひどい場合にはちゃんとびつくり箱だつたのに、『びつくりさせやがつて』とか怒られたりし

て」

「キヤバクラ行つて『そんなにお酒飲んじやダメ』つて説教されりやそりや怒るわな誰だつて」

「そういう『説教キヤバクラ』とかありそう」

「だからなんでも底抜けに戯画化するのも問題なんだって。なにがホントなのかわからなくなるから」

「わかんないようにしてる勢力があるんじゃないの？ ロスチャイルドとか」「そういう陰謀がありやまだマシなんだよそいつ倒せばいいから。

違うんだ全員が全員で『本当のこと』を見たくないから、『本当のこと』を言う人を黙殺して罵倒して排除するんだ。

俺だつて偉うこと言つてるけど自分に都合の悪い盲点突かれりや発狂して喚き散らすと思う

「ポンちゃんとどこまでもクールだからんなことないと思うけどな。

まあたしも普段から喚き散らしてるから多少のことでは喚き散らしませんよ」

「鈴木みたいな奴の方が本質掴んでんだよ。自分が頭いいと思ってるやつほど頭悪い」「だよねー。

いや待てあたし頭悪いって言つてる？」

「頭いいって言つてるの。

宇宙つてのは知らないことだらけなんだから、俺達の知つてることなんざ〇・〇〇〇……%の、とにかくほんの一欠片で、それで上下あるとかないと意味ない話で」「そうだよねえ。

頭いい人つてだいたい上から目線なんだけど、上から目線なんて使つたら人の印象激悪になるじゃん。そんなこともわかんない人つて、バカだよね」

「そそそそそういうこと。

『あの人は要領がいい』つて人に言われるのは、最悪に要領が悪い』

「いい評価じゃないもんね」

「まあ、それはいいんだけど。

さてどうしたものかねえ……」

「司馬遼太郎先生がさ」

「またビッグ・リヨーが。

ちょっととなんでそんな文学偉人のことよく知つてんの」

「あたし文学少女なのよこ一見えても」

「あなんかそいや本いっぱい持つてんじゃないでも！ あれ全部マンガかと思つてた！」

「だいたいマンガ。でもいや、えとねあたしどうも『本』が好きなの」

「そうなんか」

「うん、Kindleとかもだいぶ買つたんだけど、ピンと来ない。便利だとは思うけど、同じ本だつ

たら本買う」

「わからんでもないなあ。

まあ絵は現物とレプリカの間に歴然と差があるので、同列には語れんけど「いやそれで司馬センセが、しょつちゅう言うのは、意訳すると

『作者のアルコール分は3%とか5%とかでいい』

つて言うの。何言つてるのかなー、つて思つてたんだけど、センセのは歴史小説だから裏付けの無い妄想はほどほどにしひきなさいよ、という意味かなと思つてたんだけど

「ああ、だからそれつてつまり今言つてる言い方なら『司馬戦術』で」

「歴史的な事実をブワーッと並べてその中にちよびつとこつそり、自分の『イイタイコト』混ぜてる、つてことかな」

「かもしかれん……」

「ふふつ。なんかそれつてでも子猫の山の中にグレムリン混ぜとくようなもんだね」

「まあまあ」

「そんなウソつかなきやなんないもんかに」

「嘘じやないさ。

だれもグレムリン入つてませんとも言つてないし、猫山とも言つてない」

「いやでもフツーそー思うじやん

「それは思う方が悪い。ヘヘッ

「いやまーそーだけどー。そーだけ・どー」

「眞面目な話、芸術だつてエンタメだつて伝えようとする者が居て伝えたいものがある以上、まちがいなくコミュニケーションなんだから、この『仮面被つた者同士』っていう形は頭の片隅にでも置いといて」

「そこで無理矢理にでも突破するか……あるいは仮面に投げ渡してあとはあなたの自由に、と言ふか……」

「まあ正面から『正義は勝つ！』みたいなのはそれだよな、言うなれば。間違つてないし悪くもないけど」

「効果は薄い。仮面の未発達な子どもならあるいは。ああ、だから子ども向けつてそういうの多いよね」

「子ども向けはむしろそれがいいんだ。羨ましいな」「戻りたいよ純真なあの頃に」

「戻りたいねえ」

「あれポンちゃんでもそう思うん？」

「俺色がダメなんよ。きっと子どもの頃なんか良くない経験して色センスを大いに毀損した。その前に戻りたい」「えーそんなことつてあるかなー」

「トラウマつて超バカにできんぞ。俺は日本人が夜異常に煌々と螢光灯のまつちろな灯り点けて

点けて点け倒すのは、灯火管制の中B29に焼夷弾落とされまくつて家も人間も焼かれまくつたトラウマだと思う。怖いんだよ暗闇が。だから死ぬほど明るくする。戦後七〇年経つて二世代回つてもまだ怖い、暗闇が

「んー……日本人白大好きだからね。白い光見れて天照大御神だつて喜んでんじやない?」「まあそれもあるかな。

ああ色センスさえあれば

「ポンちゃんさあ、いつも外そようとするつしょ。あれ色はあれ外しちゃダメよお。持つて生まれたセンスある人以外わー」

「いやだからー」「ね」「おう」
「そりやなんでもかんでもは持つて生まれませんよー。なんか香水の本で読んだ話なんだけど

「ネ、その名も『鼻』つていう職業がフランスにはあつてまあ香水の調合とか評価とかそういう仕事の人なんだけど、これは基本的に嗅覚の天性が必要らしくて」

「なんか大変そう」

「何十人に一人しかそもそも持つてないらしいよそのセンス」

「へー」

「あたしも自分描くからよく色は觀てるつもりだけど、色センスも同じぐらいかへタしたらもつと居ないんじやないかなあ？ デザイナーとかつて人種でも怪しい人いつぱいいるよ？」

「でもそういう場合にはカラーリストとかも付くんじやないの？」

「感性分野の資格なんかアテになるわけないじやん。知つてるくせに」

「まーねー」

「クルマとかでもびつくりするようなダッサイ色のクルマあるもんねえ」

「いや！ クルマは擁護させてくれ、あれは売れる色とかあんのよ、そのクルマや形に合う合わないとか、色そのものの魅力とか関係なく」

「例えば？」

「パンツみたいな黄ばんだ白あるだろ。あれパールホワイトつつってほとんどの車種で一番人気になるんで、どんなクルマにもほぼ設定される」

「あー！ あるある！ あれキヨーレツにダッサイよね！」

「売れるから。売れるは正義。売れるから」

「五七で来たよこの人は」

「まあレも絹かなんかをイメージしてんだと思うんだけどね」

「クルマつて鉄でしょ？ 絹じやないじやん！」

「この国の人はそういう欺瞞にはなぜかとことん無頓着なんだつて。昔ハンドルあるだろハンド

ル。あれでウレタンのハンドルに革巻いてるみたいなステッチ入れてたハンドルがあつて

「うえええええ

「触った瞬間『ヒイイイ！』つて悲鳴あげて仰け反つたさ」

「おそろしい……おそろしいわ……」

「ウレタンはウレタンなんで、もちろんウレタンであることの範囲内で質感を向上させるのはいいと思うんだけど、革の真似をするつていうのはそれは『嘘』なんだよ。

それつて『わたし嘘つきますよ』つてメーカーの宣言なんで、ハンドルだからいとかつてことじやなくつて、それエンジンとか安全装備とかで同じことやりかねんつて宣言じやねーか。そんな危ないクルマ乗れたもんじやねーだろ？ よくこんな欺瞞や嘘に平氣でいられるなあ、つて心底意味わかんない

「まやな言い方あえてすると、普段から欺瞞にまみれてるからね」

「ああヤだヤだ

「ヤだねえ。

……んでも嘘も欺瞞も仮面を突破するためには、必要かもしない」

「ああダークサイドに墮ちそうだわ。

「ルーク大きくなつたな」

「アナキンを非行防止ボスターに使つたのつてあれ絶対ネタだよね」

「決まつてるじゃねーか警察屋さんだからってユーモアが無いわけでも無からうし」

「にしてもエピソード123つまんねーよな！」

「俺1観て切つたから23の評価はできん」

「あんた一番キツイんだよいつでも。どこで切つた？　あたしあののベーとしたCG大会戦シン超ダメ。老いたなルーカス」

「俺はポッドレースかなあ。セルフオマージュは無しではないけどこんな安っぽいとこで使うなよつて。必然性も無いし」

「ジャージャーにキレてる人つて転位行動だよね」

「そうそう。映画自体クソだつてこと認めたくないからあのキャラが良くないんだつて思い込もうとしてるだけ。あんなキャラなんぼでも居るもん。」

「まあしかし擁護するなら全部後付けだからな。難しいよそりや。『メイトリックス』の23に比べりやマシだろ、我慢しろ」

「でも目の前に数百億転がり込んでくるのが確実な誘惑があれば転ぶよフツー。それは。うん。転びたい」

「うん。俺も我慢する自信ない。でもあれ我慢してたら、『ブレラン』の地位を奪えたと思うんだ」

「えー？　そーかなー？」

「あれは過大評価されてると思うなあ。パロディとかで拡大再生産され続けてるから原典としての地位が揺るがないだけでー」

「いやいやいやいや、言うても『意識とはなんぞや』は人類のテーマですって。『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』は名作中の名作です。『MATRIX』バジorkとは格が違いますよ格が」

「同じじやんテーマ」

「あれ降ってきた系かな」

「いや。いや、あれはもうモロにオタクが今まで観てきた作品の美味しいとこ集めたパロ映画作つてみたら当たつちやつて泣きながら二作目三作目でカッコつけて案の定化けの皮剥がれましたつて作品じやんか。でも次『スピードレーサー』作つたのは自分のことがよくわかつてて偉いと思つた」

「アメリカのショービズ界は恐ろしいから。たぶん2作らなきや殺すとかそんな世界だよ」

「あながちそんなバカなとも言えんな」

「アングロサクソンは怖いよ、アングロサクソンは怖い」

「原爆落として月行く奴らだからな。気が狂つてるとしか思えない」

「まどこの民族も気が狂つてるとこあつけどねえ。スケールおかしいよねえ。やっぱ発狂しないと神様降つてこないのかな」

「神様つて難儀なヤツだな」

「最初に罪を考えだしたつまらん男ですからね」

「いるさつ ここに一人な !!」

「アニメめっちゃ観てんじやん」

「ネットで流れてる断片で知ったかしてるだけだ。まいづたか」「いばんな」

ピーンポーンパーンポーン……

ただいまより、コミック……

拍手が起こつた。姫も大きな音立てて手を叩くので俺も真似た。立ち上がりつてサムアップする
ジョセフイーヌ。

「さあ始まるぜ、氣合入れていこう！」

「おう」

いや気合入つてんなー、なんてのんきに思えていたのは数分だつた。

その後はもう。

『ローズ＆リリー』と鈴木の人気を確認して目が回った。部数三〇〇と聞いたけど始終お客様とやりとりしてる感じ。そこに写真いいですかとかサインくださいとか……サイン！　俺も求められただけどやんわり断つた。

と、お昼過ぎにはほぼハケて……と、唐突にパシャツとフラッシュが光った。カメラの主は。

「……もっちゃん！」

「元口さん……風邪大丈夫？　マスクまでして」

「だいじよおぶだいじよおゴホ、本田君ごめゴホゴホねゴホ」

「ぜんぜん大丈夫じやないな」

「とりあえずブース入つてきなつて。座れ座れ」

俺が立つて席を譲つた。

「……まつたくもー昨日からメールも電話も無いから！　たぶん来るんだろうなと思つたらやっぱ！」

「でへへゴホ、ううんどうしても本田君に会場で謝つとこうつて」

「嘘つけ、新刊の売れ行きが気になつただけだろ。だいじょうぶ全部売れたから」

「反応どう?」

「まだわかるかんなもん。とりあえず中身見た人はみんな買つてつたから、心配すんな」「心配はしてないけど……本田君ごめんねコスプレまでさせて。すつごく似合つてる」

「そお? ありがと」

「ランちゃんともお似合い。怪我の功名だね」

「つたく。半ズボン履きたくなかつたらそう言えばいいのに」

「ううん履きたかつたよ。白いタイツ履きたかつた」

「元口さんマンガ早いね」

「ふふふ。ありがとう。でも最近自信無くしてて……って聞いた?」

「いや。いまペラペラめくつて巧いな、つて」

「へへへ。美術部の人にくわられると嬉しいな」

「ポンちゃんちよつと回つといでよ。せつかくだし。あたしともつちゃんここ居るから」

「そう? じゃ……」

元口来てから鈴木ずっと怖い顔。ありやお説教だな。作風からして元口が引っ張るタイプなのかなと思いきや、やっぱ鈴木がリーダー格か。

…………よしせつかくだから噂の「男性向け」ゾーンを……

……

…………うおつ、あそこか！ ちよつ、この寒空に上空に雲沸いてますよ積乱雲みたいのが！ 視界があそこだけ違うんですけど霞んでて！ もちろん人口密度も多い！

ちゃーらーらー ちゃららーらー らららーらー

RPGの軽快なBGMが、そのゾーンに足を踏み入れた瞬間変わった。

べろべろべろべろべろべつべつ

一步ごとに体力が削られる毒の沼。目に入る物入る物肌色、肌色、ピンク色、肌色、肌色、肌色、ちよつと黒、肌色、ピンク色……

あー！

毒沼はいつ果てるとも無く広がり、多数の勇者達が同人誌の盾とアイテムの鞄を装備して右往左往するここは地獄の一丁目、死神と堕天使が微笑む街。

しかしふらふら歩いてるだけでもなんなので、手頃に人気あるお誕生席ブースを覗いてみた。作品もキャラも知らん！

「見ていいですか？」

「どうぞどうぞ！」

「うわあ……おお、おお？　うおー、おお、おお、おおー……うひ。
ぼくにはしげきがつよすぎますー」

「すびませんありがとうございばしだ」

「あの、お客様、それ『俺おじょ』の執事さんのコスプレですよね！」
「あ、はい、ちょっと友だちにやれって言われて」

忘れてた……
ぱずかちー

「僕マーヴェリック大好きなんですよ！一緒に写真とかつてお願いしても迷惑じゃないでしょ
うか！」

「あ、いや、えー、はい、だいじょうぶです」

「やつた！福田さんこれ写真お願いでできる？できる？」

ぱしやつ、ぱしやつ、ぱしやつ、ぱしやつ……

うう……道行く人の視線がー。

「ありがとうございました！あの、これ、良かつたら持つてってください！」

「え！いいんですか……はい、いただきます、ありがとうございます」

この過激な表紙どうしようこれ……なんかホントに買ったエロ本学生服の下に隠す中学生みた
いな……いやほとんどそうなんだけど……

ほうほうのでいで焼きそばを三つ買って、ブースに帰った。飲み物はなんかいっぱい差し入れ貰つた。

「元口さん帰つた？」

帰した。つたくもー、肺炎にでもなつたらどうするつもりなんだよ！」

まあまあ 悪気あつてやつたことしゃなし
「ふるふ。ごつてのつらやん家こいぶせらで

「あるよ。だつてもつちゃん家にいさせるために、ポンちゃんに頼んでき、衣装も借りてさ、あたしのミスでポンちゃんロビーで寝させてさ、ぜんつぶ無駄じやん！」

「いやいやまあまあ来かくなる気持せれからんでもないから」

「あたし無駄なのはいーけどポンちゃんの努力で力が効力で力がも無駄でした。」「よくわからんのかつてそれが……」

集解

俺今回呼んでもらつていろいろ経験できてめっちゃ楽しかったから。元口さんにお礼いいたい
ぐらいで」

いいよそんな甘やかさなくつても!」

「足りなかつたらホレ、エロ本」

「……うわお。

「これこの作品子どもの頃よく観てた。あの作品にこんな……ハードだなこれ!! ポンちゃんこ

「なん好きなん!?」

「いや目についたの適当に立ち読みしてたら写真いいですかってお礼にくれた」

「あたしのマーヴエリックはこんなの読まないの!」

「これは没収です」

「むしろ助かる。家に持つて帰れんわこんなん。ママに見つかつたら泣かれる」

「泣かれる系まだいいよ。家族会議系とか」

「ああなんか『うわあ』てのいっぱいあつた」

「そんな勇者には3ホールのこのへんから2ホールのこのへんまでもオススメ」

「いつたい何が」

「我々BL星人の中でも特に濃ゆい大局の大お姉さま方が」

「かなり発酵がお進みになつたような」

「もう液体になつておられますね。純度があがつて透明なアルコールのような。サークルさん方はまだよろしいのですが、お客様方がこれがもう。あたしが門前の小僧だとしたら空海・最澄のレヴエル」

「解脱」

「生き仏」

「ああ……遠慮しちゃうか」

「人生なんでも経験ですよ」

「しなくていい経験もあると思う」

「あたしのマーヴェリックは挑戦心を忘れない人よ！」

「しなくていい挑戦もあると思う」

……とか言つてゐるうちに全部はけて、撤収とあいなつた。

「まだ早いけど今回は帰っちゃうか」

「何時までだつけ。四時？ そりや暇だな、帰るか」

「お茶してゆつくりしよー。奢るー」

「いいよ最後は俺が奢る」

「いいつていいつて。見たつしょ売上げ」

「ああ……そか、三〇万だもんな」

「イエース。これみんなには内緒よ」

「そつかー。なんか宿とか飯とかバンバン奢つてくれるしそんないい服持つてくるし金あんなー」と思つてたらちゃんと自分で稼いでたんだなー。えらいなー」

「ほほほほほもつと褒めて。

お金稼ぐの、楽しいわよ?」

「楽しいねえ。じゃパヘでも奢つてもらうか」

「いーとこあんの。誰連れてつても文句出ない素敵スイーツ。いつも一人で帰りに寄るんだけど。案内する」

「おう。

……てか着替えどーすんだこれ

「その店入つてるビルの三階に広い多目的トイレあるから」

「そこまではー?」

「タク乗ろタク

「うえーい」

タクシーの運ちゃんは……慣れてるか。今日ここで客待ちするようなプロは。さらば国際展示場、またいづれ……三年ぐらいあとでいいかな。

*

「……で、なんでこの服着たままなんだ」

「いーじやん最後だしー。執事付きはー」

「いや……ここだつて誰も『こういう人達です』って理解してる人居ないからみろ周りからチラチラ……」

「だから『こういう人達だ』ってわからしめるわけよ」

「お待たせしました。プリン・ア・ラ・モードパフェとバナナヨーグルトパフェ、特製あんぱんお二つ、ホットミルクティーとブレンドコーヒーになります」

「あども」

「これこれ。これをこうスプーンクロスして食べさせ合う、と」

「こう……てできるか!!」

「これで写真撮つてたらどう見ても『俺おじょ』のコスプレ撮影でしそうがー」

「あ。いや、えー?」

本物のバカが二人嬉しがつてゐるよう見えないー?」

「こんな服来て街闊歩してパヘ食べるほどのバカはさすがにあたし達の視界には入らない世界に生きてると思う」

「リツツとかに居るのかな」

「居るよほんと偽装食品食わされてんの。ヒヒヒざまあみさせ」

「私達のホテルでは従業員ひとりひとりに二千ドルの決済権があります!」

「でもジユースは紙パックデース。学園祭の模擬店デース」

「金持ちがミスした所叩くの楽しいな!」

「ミスじやない、ウソだよ。だから叩くんじやん

「おつさる通り」

「さ、はい、あーん」

「うええ……はい、えー、あ、あー」

「カシュイン

「もいちまい」

「カシュイン

「角度変えて」

「カシュイン

「笑顔チェック……あこの戸惑いの表情大好評でとつてもいいと思うんだけど、満面の笑顔も一枚欲しいなはいもう1ショット」

「満面の笑顔なんて簡単にできるかよタレントじゃあるまいし」「リツツ叩いてる時の湧き上がるドス黒い悦びを思い出して！」

「……自分の人間性がイヤだー……」

「いいかんじ。いい泣き笑いが撮れた」

「それが目的かよ。なんでそんな不必要に策士なんだ」

「すいませーん、写真おねがいできますかー？」

「うおい！」

店員さんめっちゃ笑顔で対応してくれた……
食べさせあいつこなのに……

「……あの、これ、『俺おじょ』ですよね！」

「はいそうです！ 私たち大好きで！」

「たち」

「わーすーごいよく雰囲気出ますー。特に彼氏さんマーヴエリックそつくり!!」

「あは、いや、ども」

「でしょお？ 店員さんもいかがです写真一枚」

「あつ、いいんですか!? ジャあとで私物のケータイ持つてきます!!」

「……人気あんだなこの作品」

「ポンちゃんのマヴが人気あんの」

「止めてくれもう。会場で注目浴びるのちょっと楽しいとか勘違いしかけてたんだから」

「イエス！ そのまま突っ走ろう・ゼ！」

「いやいやいや。いやいやいや。でもコスプレがんばる人達の気持ちもちょこーっとだけわかつた」

「演劇とかね。普段の自分とは違う自分」

「ま確かに解放感あるよな……」

「元通り
いややっぱりそれは基本だと思うよ。
まあ、小難しいこと考えずに、なんか虚構に没入できりやそれでいいのかな、つて一周回つて

「そのソースちょっとちようだい」
「ほい」

「んーんー」

「……食べさせませんよ。撮影はもう終わったのだから」

「周囲の期待に応えろ男だろ」

「さつきの店員さんの期待じやねーか……つて、めっちゃ嬉しそうな顔でこっちガン見してる…」

…

「でしょお？ も大興奮ですよ今日眠れない」

「ファン心理つてのはよくわからん……」

「あ～～～ぱく。

「ん！ ひけふ！」

「わ垂らすなおい、こちらもー……ちょっと動くなよ拭くから」

「ほうゆうひーんもね、本編つぱくれ」

「嘘つけただ零しただけだろお。つたく」

「あいがと。店員さん大興奮」

「殺す気か」

「……ま堂々巡りになっちゃうんだけどさー。ほいあんぱん。こここの美味しいんだよー！」

はい、

あー」

「あー

……ん。……あこれいいな。フツーに売つてるとぜんぜん違う。なんだろ？ 餡があつさり

で皮が旨い？」

「そそ。酒種効いてるパンの酸味が餡の甘き引き立ててるよね」

「いやちようどいーんだ餡の甘さも。へーなんであんぱんなのかなと思つたら」

「そう！ このあんぱんのようでなければならぬのですよ！」

「ん？」

「テーマが餡で、それを美味しいパンで包みこむと、おとどけしやすいのです

「なるほどね。餡ばっかりじや胸焼けするわな」

「パンがあると餡も引き立つしね」

「しかしパンも旨くないといかん」

「それが技術つて意味じやないかなと思うんだけど」

「あー……そうだな、餡の所つて実はあんまり技巧とか関係ないよな。むしろ素材で。クラシッ

クとか落語とかもう中身わかつてるもの演じるわけだもんなあ」

「そうそう。でも美味しいよねー。餡はあんまり変えようが無いんだよ。

まなんでもあんぱんに見立てることもないけど」

「パン、つていうのが難しいんだよな、奥が深くて」

「でも実はそれ泥沼で、パン極めなくともあんぱんとしては極まることもある」

「コンビネーションというか餡に合つたパンが渾然一体となつて……まあバランスとか総合力とか言い出すと何も言つてないのと同じなんだけどなあ」

「ポンちゃんの絵は餡だけ皿に生盛りなんだよ」

「おまーのマンガはパンだけ焼いて中空洞なんだ」

「失敬な!!」

「えつ、てことは……組まない?」

「む。俺が原作でめーが絵か」

「パンネームは本田ラン」

「そのままじやねーか」

「足塚茂道」

「だからその臆面なくパクつてくるなつて。癖になるとでかいやらかしやつちまうから」

「パクリがバレても周りみんな守つてくれるぐらいビッグになればいいんだよ! ヤマトヨセンセみたいに!」

「誰だそれ。そしてなんというチキンレース」

「F先生が言つてたんだけどね、四畳半でマンガばつかり描いてる青春だけど、だからこそ想像力の翼が羽ばたくんだ、つて」

「む。まあ、それはそうかもしけん。

でもなんで」

「あたし餡入つてないのちょいコンプレックスだつたんだけど、そんなに、気負つて、いい餡入れようとか思わなくともいーんだよね」

「ああ、そゆこと？」

「そうかもしけんね。司馬遼太郎が3%つつつてんだからウチらもつと無くてもいーだろ」

「ドストエフスキーとかトルストイとかもういいかげんにしろよつてぐらい長いもん。『アン

ナ・カレーニナ』なんかあれ有閑マダムの浮気の話よ？ 昼ワイドなら一五分で済む

「いやまあ、薄めるために長くしてるわけでもないだろうけど……『竜馬がゆく』も長いよな
あ

「薄めてんだよあれ！」

「それ悪いことじやなくて、必要なことなの！」

「そういう世阿弥センセも『秘すれば、花』つて言う」

「隠してんだ。隠さなくともいいものでも隠されると観たくなる！ そうそれはエロス！」

「そうだよさつきの同人誌もなんか超エロいはずなのに微妙にワクワクさんが来ねーなーと思つたらなんでもかんでもオープンにしすぎなんだよいですかエロというものは！」

「ホイキタ！」

「例えればスズ……いやダイナマイト女優さんがもう何もかも全部放り出してオウイエスカモンバツチコイ言うよりも！」

「言うよりも！」

「元口さんみたいな清楚な女の子がお祭りだつてんで普段着ない胸ぐりの空いた服着てブラ紐がチラ紐でぼくが恥ずかしながら勇気を振り絞つてそれを指摘すると顔を真つ赤にして『えつ、えつ』とか言いながら紐をこうコネコネコネコネ服に押し込もうとすること！この！」

「前の例にあたし出そうとしたよね」

「すんでのところでそりや悪いと回避して後段テンション上げることで無かつたことにしようとしてんだから協力しろよ。つまり鈴木の蹲踞より元口のチラ紐つてことだ」

「力士扱いって国技戦士つてことで褒めてもらつてるつて捉えていいのかな」

「確認するまでもねーだろアスリートいやアスリーテスとして最ッ高の褒め言葉だ」

「喉輪———！」

「ぐげ———！」

「八百長するぞ！」

「格闘技なんかアングル書かなきや興業としてなりたたねーじやねーかガチでやつたらケガすん

だから。一年三試合ならともかく九〇試合もすんだから。何をムチヤ言つてんのか」

「でもあたし琴光喜があれで辞めさせられて開いた焼肉屋の名前が『やみつき』つて聞いた時に

『人間万事塞翁が馬』 だなつて思つた

「うむ。世界はそんなふうにできている」

「何の話してたつけ」

「薄めるとか隠すとか」

「だからあたし、昔からミニマルな方が絶対いいと思つてて、iPhoneのデザインみたいに」

「ニシキヤ」

「でもみんなあれにカバー掛けるんだよカバー。ストラップ付けるんだよストラップ。ミニマルでもなんでもねー、超デコレート。口ではこれオサレですね素敵ですね言つてキティとかバーぶら下げて酷いのになつたらふなつしー！ キモツ！ ステイーブ泣くぞ草葉の陰で!!」

定期的にキモいキャラ流行るよな。あれなんなんかな

「生活から汚い物全部隠して清潔ピカピカにしてるからに決まってるじやん。天然痘で野垂れ死んだ死体道端にある生活してたらキモいもんなんか要らんわ。あんたアツプルストアで生活したくないつしょ？」

無いねえ

「IKEA凄いよ適当に散らばらせてダサくして『あこういう部屋いいな』と思わせる。それはいいんだけど。

もつちやんがなんか嘘くさい愛憎ドラマ描くの横目で見てて「よくそんな嘘描けんな！」とか

思つてたんだけどあれつて

「親友じやないのか」

「そしてライバルだよ。

まあこうちつちやい種みたいなのあつて、だいじに育ててんだよね、もつちゃん的には

「ああそういう意味な。そうだろうね。人間の感じることなんて古今東西大差無いからな。とい
えばそう、この話をせねばならんだろう本当に頭いい人つて世の中居てさ」

「誰々？」

「小林秀雄」

「だれ？ それ？」

「なんか難しいこと難しいように言つてるだけの人かと思つたらそうじやなくて、この人が言つ
た、とこれまた頭のいい人である吉本隆明が」

「だれ？ それ？」

「まとにかく頭い一人らなんだよ。自分の頭脳に自信がないぐらいには。俺『赤穂浪士』が大ツ
嫌いなんだけど」

「嫌いそうだよねポンちゃんあの話ね」

「なんであんなテロ行為で喜んでんだ気は確かか、つて一二月上旬になるたびに日本人に生まれ
たことを呪うぐらいだつたんだけど」

「それは気に病みすぎ」

「秀雄が『あれは誰の心にもある復讐心の物語』と喝破してて
「ああなるほど、てか普通に観てればそうじやん」

「えー？ あれ見て復讐譚だと思えるー？」

「だつてあたしがフランチャイズのコンビニでバイトしててそこの店長が、イケズな本社から來
たスーパーバイザーに虐められてブチ切れて暴行して警察に捕まつてお店お取り潰しになつてバ
イトクビになつたら、あたし店長じやなくてそいつ恨む」

「その回路がつーと繋がるところが女人の人つて現実的だと思う。

まともかくそう言われてやつとこさつとこ『あー』と腑に落ちたんだけど、これつてつまりパ

ンが現代に、というか俺に、合つてないんだよ。餡は、そう言われると、美味しいんだけど

「ああ、そゆこと。
つまり復讐譚のところにもうちよいくつきりフォーカス当たつてると俺だつて普通に観れたの
に、と

「そうそう。

でたぶん、中世とか古代とかの作品つて、パンが合つてないのね。流行り廃りとかもあつて。
でも餡の美味しさつては、人間である以上あんまり変わつてなくて、だから残る。ところが人間
には、そこ分離して味わえる人と、分離できないかしにくい俺みたいなのと二通りあつて」

「あーそれあるかもしんないね！」

あたしわりと得意かなー」

「マンガ描いてるぐらいだから抽象化してポイントを抽出するのが巧いんだろ。う資質あるからマンガ描いてるつつーか」

「ああ……。ポンちゃんもつと渾然一体だもんねえ」

「そう。だからそのへんもうちょっと考えていただけないと嬉しいな、古典とか、あるいは外国の

翻訳とかしてゐる人には

「あでもねマンガもね、

する人いつばいいてね」

だから俺のもつと酷い

は後付けだ。

だいたい人間、感じてのことと言語化する能力なんて無いんで

そこが問題だよね

いや、だからこそ我々が絵にしたりマンガにしたり』

音楽にしたり演劇にしたり周遊にしたり』

内なる神秘を言語化しよう、構造として完璧に再構築しよう、なんて試みをこころみること自

体がおこがましい。冒涜だ。

その場その場で、感じたことを、それぞれの手段で、書き留める他ない』

「四コマ一応起承転結あるんだけどさ」

「ああ」

「最近、でもないけど、それ崩れてきて、たぶん最初は、というかそれがクローズアップされ

たのは戦車先生じやないかと思うんだけど、まそれはいーんだけど、もう萌え四コマなんか全然組み立てなんか無いもん、でもちゃんと人気あるし、あたし読んでも楽しいし』

『まあ全てのセオリーツてのは現実から抽象化されて導かれてるだけで、そのセオリーツに従つて現実が動いてるわけじやないんで』

「そこもよく間違うよねー、人間ねー』

『理系の研究者になりそこねてルサンチマン溜めてる奴とか始末に負えないよ。科学の歴史なんてセオリーの書き換えの歴史なのに、今現在のセオリーにしがみついて『いやここはこうだからこうです科学的事実です』とか言つてこいつバカかと真剣に心配する。おめーそんなバカだからポスト無かつたんだよ、誰かツッコミ入れてくんなかつたのその歳まで?』

『入つたけど聞いてなかつたんだよ。』

『運命だね』

『まあまあ。』

聞く耳、だいじだよな

「うん。あたし自分へタだつてわかってるから比較的聞いてるつもりだけど、もつちゃんとか超聞かないから」

「ああ聞きそうにないなあ」

「ポンちゃんから言つてよ。なんかコピーマガジンの絵めっちゃ喜んでたよ。目キラキラしてた」

「ホント?」

「だからあーたのデッサンとかそこそこ決まつてる修練積んだああいう『ちゃんとした絵』が彼女の憧れなのよ」

「だつたら今から練習すりやいーじやん。まだ若いんだし」

「今のフォーム崩れるの怖いじやん」

「いや、今の、つて、たかだか、いやそういうと悪いけど、同人誌で、三……」

「いや、その程度のマイクロ成功でも成功は成功なのよ。高校生にとつて年間数十万入つてきてファンにきやぴきやぴ言われるっていうのは」

「いや、それはそうだ、け、ど……いやあ」

「現実的すぎるところ落とし穴あるよね」

「まあ元々が壁突き破るお手伝いできるならいつでもしますけどもね……」

「もつちゃんの壁突き破っちゃダメよ」

「下ネタ禁止!!

「あでも元口すごい人気あつて
「知つてる知つてる。だつて美人だし控え目だし黒髪サラツサラだしあんたら好きでしょああい
う生き物」

「それもだけど、いまこうしてみると『秘めたる芯の強さ』みたいなとこがきつと魅力何割か増
しなのかな、と思う」

「あたしも増してる?」

「あんたさつき言つたみたく表に出し過ぎてるからなあ。まあでも鈴木の魅力再確認したよ
「えつ? なに? なんと今?」

「いやあなんか、あの場でくるくる走り回つて元口叱り飛ばして鈴木は迫力があつた。『おつ
かさん』つて感じ。あそりや漫研で中心に居るわなあ、つて」

「『おつかさん』かあ……

「やつぱカプセルに入れてね、中で溶ける」

「お、仮面の突破法ですか」

「そうそう。だからあたしのように、フランクでハイテンションキャラのフリをして距離を縮め
て、間合いに入つた所でプスッと刺す
「刺してもらおうか」

「ポンちゃん……昨日今日、ホントにありがとう」

「女の子って怖いよね、こうして上目遣いでモジモジしてると誰でもいっぱいの可愛い子を演じられるつてところが」

「無理ばつかり言つたのに……夜ほんとにごめんね、あの時ツカサくんほんとにやさしいな、つて思つた……」

「いやいや。名前で呼ばなくていいから」

「ホントにホントだよ!?　だつて……夢に、出てきたもん……」

「演技派ですか！」

「真面目に聞いて！　あたし真剣なんだから！」

「えつ、どこまでネタでございましょう？」

「ネタからマジな話にシームレス移行はラブコメの定番でしょ!?　こんなチャンスでもなかつたら、恥ずかしくて告白なんかできないじゃない！」

「コク？　あいや、えー！」

「ええい、わかつてないなあ、

あたし、ポンちゃんのこと好き！」

だから……だから付き合つて！　おねがいします！」

両手突き出しどーん。

えーと、と。

俺の頭蓋骨の中で自慢のZ80がフル回転して火を噴いた。

「…………」めん。やつぱこんな形じや真剣に受け取つて貰えないよね。あの、あたしのキモチだけ知つてくれたら、それでいいから……

「あ、いやいや、ちよつ、ちよつとビックリしただけで、あ、えー……はい、あの、ちよと、考えさせて貰えれば、と思ひます」

「……ホントに？」あたしみたいなチンチクリンのオタク女でも？』

「いや！ 鈴木は……ランは、可愛い、よ」

「……

……ふつ

「あほらやつぱり！」

「ぶわーーーっはっはっはっはっはっは！」

録つた！」

「録るな！ 下でモジモジしてたのそれかよ！」

「あははははははは、刺さった刺さった！ これ凄い！ 凄いよポンちゃん！ 凄い作戦！」

「つたく……」

「ま、録られたつて別にいーけどな。ホントのキモチだから」

「……へつ？」

「前フリありで突然そんな風にされて芝居だと警戒しねーわけねーだろ」

「あいやだつてそれは」

「それでもいいから俺は……俺は、今日気づいたこと、伝えたかつたんだよ」

「あの、えー」

「ランつて……ほんとに可愛いな、つて」

「えと、えつと」

「俺お前の……マーヴエリックになりたい」

「……」

「……」

「……」

「……のろけーすけ」

「……はひ？」

「アハハ、このノリにカウンターで返すのこそラブコメの定番だろーが。真っ赤になつてツバ呑

み込んでやがんの」

「コロス!!」

「いや可愛いねえランちゃん可愛いよおもう最高！　お嫁さんにして！」

「コイツほんとにだからモテないんだよあんたは！」

「モテなくともいいもんランちゃんが彼女になつてくれるからー！」

「んなわけねーだろ！　芝居つつてつでしょー！　あれー？　そいともほんとにあたちに彼女になつてぽちいのかちらねー!?」

「あーなつて欲しいなつて欲しい。今度は熱いお茶が一杯怖い」

「なるぞホントに！」

「あれー？　ほんとにボクチンとお付き合いしたいのかちらねー？」

「あーなつて欲しいなつて欲しい、マーヴエリックになつて欲しいなー。」

「もういい、このファイル世界中に配信する」

「じや俺は……この一部始終を」

「あー！　なに、なんで録音してんのー！」

「いやさつきあんぱんとか言い出したからこれ後から聞こうかなとか思つて……らつきー」

「こつ、こんなの、バレたら、あたしたち、あたしたち……ラブコメじやん！」

「ふつふつふバラされたくなれば……あすいませーん、もいっぱいこの無農薬フェアトレード

コーヒーを

「ちくしょ」

「元はといえばお前が刺しに掛かるからいかんのだ。これからは相手を見てやるこつたな」「相手を見たから……ポンちやんだから、やつたんじやない……」

「はいもうだめ！」

あえ――――――ひ――かか――てよ――――う

「鎌木さんティアエンス弱いね。オフエンスはそこそこだけど」「攻めダルマと呼ばれております。

乙女をタルマとか呼ぶなよ

「『人間至る所青山あり』ですよ」

【青山】 街道沿いにいたるところに「青山」あるよね。

『はるやま』とな

あくそちくしょーーーー！ パへおかげでやる！ 店員さん、店員さーーーん！」

「まあまあ、いまのとかマンガになによ」

このクソ余裕くつそーああああもおおおおムカツつぐーーーーうううう！」

ケケケケ。

まあだから、こうやつて、仮面と仮面がぶつかり合つたり、仮面と本心が乖離してたり、仮面の存在そのものだつたり、つていうこれ 자체が芸術の大テーマであつて、といふか、つまり『仮面』しかテーマなんか無いような気がするね。

人間にとつて一番嬉しいことで、一番悩まされることが、コミュニケーションだから「うるせえよ！」

……店員さんこれ！ これこのヨーグルトパンナコッタ杏仁バニラパフェ！

「ジョセフィーヌお嬢様、またマーヴェリックと喧嘩ですか」

「うるちやーーい！」

「へへへへ」 「ふふふふふ

まあ、愉しかつた、です。

*

「……本田君。ちょっと、聞きたいことがあるんだけど」

「あはいなんでございましょう山葉さん」

「……これ、なに？」

元からクールな方なんだけど今日は一段とツーンて感じで……あー。
ケータイ画面に執事とお嬢様のパフェ・ショット・クロスヌーブーン。

「なんでこの写真流通してんすか」

「梶場つちに流し込まれた」

「あの女は一人次世代インターネットか。ちが、あのね、順を追つて説明しますとー」「聞いた。コミケ二人で行つて、一部屋で泊まつて、仲良くサークル活動して、パヘ」「今問題になつてるのは主に二つ目のパラグラフだと思うのですが、そこ実は私偉いもんとしてロビー降りてソファで寝たんです紳士でしょう？」

「嘘」

「証人も居るよホテルマンでもロビーで徹夜で原稿頑張つてた他のお客の皆さんでも」

「……ーン……」

あなんか眉尻と顎がちょっと上がつた。下目遣い。

「別にいいんだけど。」

本田君がどこで何してたつて。

ただね、こんな爛れた笑顔公衆の面前で垂れ流してたら、ちょーと公序良俗に反するのでは
ないのかしら？」

「それもー。経緯があつてー。会場でー。『笑顔くださいー！』とかたくさん言われてー。慣れ
ちゃつたのー。恐ろしいよね人間の順応力」

「嘘」

「ホントだつて。お前さんだつてコスプレして一日カメラに追い回されりや笑顔固まるつて
「……」

「小首傾げられても事実は事実なんだからそれ以上説明のしようがない。俺普段こんな顔せんだ
ろ？」

「だから問題なのよ。これまたいいお召し物ね」

「それさあ、眺えたみたいにジャストでさあ。なんかそのキャラのイメージに俺がピッタリだつ
たらしくて超ウケててさー」

「本当によかつたわねニッコリ」

「あ、なんだつたら今度着てこようか？ 鈴木に言えまばまた借りてくれるだろうから」

「要らない」

「このほら、鈴木の着てる可愛い服、これもきつとぱるつぺにも……似合わんな」

「がんばりや似合うわよなんだってバカにしないでよツインテールだつてなんだってやつてやるわよ、で、ランはなんでこんな笑顔満開なの」

「知らんがな。祭りの前後はテンション変だろ。あれだあれ。きっとお前もあの場へ参加した後パフェ食べるところなかんじになる」「……。

「……パフェおごれ」

「は？ なんで」

「胸に手を当てて考えなさい」

「ええ？ えー……」

「わからないならわかるまで考えること。とりあえずパフェおごれ。いくぞ」

「えつ、ちよつ、ちよつと春師匠？ 山葉さん！？ なんでー！？」

「……ちよつと鈴木さん！ 聞いたわよ！」

「ゼツツーなにそのオカマ風味」

「ランちゃんオカマ好きだつて聞いたから！」

「あつしの好きなんはホモ、てかBL。オカマじやねー！」

「どう違うの？」

「そりやあんた達オスの方がよく知つてつだろ」

「そんな細かいことはどうでもいいのよ。聞いたわよポンちゃん寝奪つたつて」

「奪つてねーし。てか寝てねーし」

「また！ ものつそいバカッフル写真観ましたわよ！」

「梶場？」

「イエース・ウイ・キヤン」

「あの歩くまとめサイトめ『絶対人に見せないから』とか言うからデータやつたのに……」

「マスコミを信用したあなたの負けよ。ホントは見られたかつたんでしょ、写真」

「きつ」

「派手なお衣装着てモノを食べさせ合うなんて、これはもう結婚式二次会の定番よね。いつの間にか話が進み過ぎだわ」

「いや……筋肉王川崎先生にどう説明すれば伝わるのか若干不安なのですが、あの写真には流れつてものがあつてね？」

「そう人生は川の流れよ。たいせつなのは今この時点。でどう？ ポンちゃん優しい？」
「普ツ。

「……まあ、うん、優しいのは優しい」

「でしょう？ ママもいつも助けて貰つてるもの」

「いつまでもそんなことやつてるとホントにそういう人になるよ？」

「なんだか板についてきちゃつたわ」

「ヤバイつて」

「いやだーかーらー。」

に

「でもツカサ、いい男でしょう？ セつかく略奪したんだから、もう離さないことね。ZETTAI

「いやだーかーらー。」

「そゆのじやなくつてー。」

だいたいポンちゃんがいい男だなんてこと、昔から知ってるよ。けどまあ、あたしの好みじやないね」

「あら？ どちらが？」

「……ちよつと、いくじなし、なとこカナ？ ウフツ」

「それは鈴木さんの本気が足りないんじやないかしら」

「グツ」

「……まつ、がんばつて。応援してるわ。じゃママお店行くから」

「誰の味方なんだよ」

「愛の味方。」

お店の名前は『ライムグリーン』。恋に疲れたら、カウベルを鳴らして？ 愛で包んで a・g

e・ル★

「チュウを投げんな」

「……あのー、春さん、それ一人で吃べるのは辛くないです？」

「へんへんへいひ。つづけなさい」

「あはい、つまり『仮面の存在』こそが人間にとつて一番触れられたくないことなんですね。コミュニケーションに不安や疑いが生じるつまり社会が崩壊するからですね。だからそこに触れられる人と人間は発狂するんです。なので芸術家はそこに触れずに触れるように工夫を凝らす。似非者は触れてるようなフリをしてそこに触れないんですけど、まあそれはいいとして、で僕が考えた作戦が

『あなた、わかつてますよね？』

とだけ言えば最も重大なこの問題に自動的に辿りつくだろうというその名も！ ほのめかし大作戦！

「それぜつたいだめだとおもう」

「なんで」

「にぶいもん、にんげんつて」

「んじや嘘・ホラ・ガラクタをぶわーつて何十も何百も並べてその中にひとつだけ伝えたい真実を混ぜとくんだ。嘘だと安心してバリア下げたところにグサッと刺さる。これぞ嘘つき悪魔・ベリト作戦！」

「却下。他人はともかくぽんたろーは嘘ヘタだからそんなのできっこない」

「そおかなあ。じやどーすりやいーんスかねえ」

「一生考えなさいな。それが仕事でしょ、アーティストさん」

「んー……道は、遠い」

「遠かないわよ。歩いてることそれ自体を道つていうの。

「そんなことも知らないの？」

「きょ、今日の春さんはなんか厳しいツス」

「……バカ」

■#マガジン

『禁書』

作者 ながたかずのぶ
発行日 2013.12.24
mail nagata@mti.biglobe.ne.jp
web <http://rakken.net/>
twitter KazuhisaNagata



PowerNetwork!!

Banned Book
Powered by Kazuhisa Nagata